

学校法人福岡学園 福岡医療短期大学

業績集【2023年】

(令和5年1月1日～令和5年12月31日)



令和6年5月 発行

ごあいさつ

福岡医療短期大学は、1981年(昭和56年)4月福岡歯科大学附属歯科衛生専門学校として開校し、現在まで43年間、歯科衛生士養成校としての歴史を歩んできました。この間、1997年(平成9年)4月福岡医療短期大学歯科衛生学科開学(上記歯科衛生専門学校が短期大学へ改組転換)、2003年(平成15年)4月歯科衛生学科3年制へ移行、現在の形になりました。また専攻科は1999年(平成11年)4月開設し、2008年(平成20年)4月大学評価・学位授与機構(現：大学改革支援・学位授与機構)による認定専攻科(口腔保健衛生学)となり、4年制大学と同等の学士を取得できるようになりました。

歯科衛生士のニーズは高く、求人倍率は22倍、歯科診療のみならず医科診療においても、周術期や悪性腫瘍の治療時などにおける多職種連携の一翼となっています。また2025年から国民皆歯科健診が政府の骨太方針に入っており歯科衛生士の需要がますます高まってくると思います。これを受けて本校は、厚生労働省の令和5年度「歯科衛生士に対する復職支援・離職防止等推進事業」に採択され、歯科衛生士の高需要のニーズに答えるべく「歯科衛生士研修支援センター」を2024年1月に設置し、運営を開始したところです。また福岡歯科大学、福岡看護大学とともに福岡市立高校4校との高大連携プログラムを立ち上げ、高校生に歯科医療の魅力と歯科衛生士の周知・啓蒙活動を行っています。さらに、今後、時代のニーズとして4年制大学化も想定されるため、教育の充実に加え、研究面でも教員のquality controlが必要となっています。

私は2020年(令和2年)4月に水田祥代理事長のご推挙で学長に就任し、医科の立場から医科歯科連携を掲げ4年が経過しました。この間、英語論文の抄読会をスタートさせ、体系的なFD・SDという形で定期的な勉強会を開催し、さらに教員の努力により、科研費の新規として2021年度基盤B1件、2022年度基盤C2件、2023年度基盤C2件と挑戦的研究(萌芽)1件、2024年度基盤C1件が採択されました。2020年から短大教員の業績をまとめる作業をスタートし、2020-2021年版、2022年版を発行し、今回は引き続き2023年版をまとめました。業績を形に残すことで教員のモチベーションの向上になればと思います。

なお、本学の研究のフィールドは、大部分が福岡学園内の福岡歯科大学、福岡看護大学および医科歯科総合病院との共同研究です。また、科研費の申請にあたっては口腔医学研究センターの平田雅人教授のご指導を仰いでいます。日頃から本学の教育、研究にお力添えいただいている福岡学園の皆様はこの場をお借りして心から御礼申し上げます。今後とも皆様方のご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

2024年(令和6年)5月吉日
学校法人福岡学園 福岡医療短期大学 学長
田口 智章

目 次

I . 2023 年業績	1
1. 著書	3
2. 発表論文	5
3. 学会発表	6
4. 獲得研究助成金	8
II . 学位取得者	19
III . 抄読会記録	23
IV . 体系的な FD ・ SD の実施	29
V . 主催セミナー ・ 公開講座	33
VI . 国際医療支援	39
VII . 掲載雑誌新聞記録	43
VIII . 厚生労働省支援事業	49
IX . 訪問教授	55

I . 2023 年業績

1. 著書

著者(全員)	タイトル	書籍名	ページ(含年)	編集者	出版社
田口智章、 吉丸耕一 朗、小幡 聡	5. 消化器疾患 ヒル シユスプルング病	小児科診療ガイドライン—最 新の診療指針— 第5版	293-298, 2023	加藤元博	株式会社総合 医学社
泉喜和子	第2章 顎・口腔領域の 先天異常と発育異常 3. 顎変形症	歯科衛生士講座 口腔外科の 治療と診療補助	36-42, 2023	池邊哲郎、片 岡あい子、里 見貴史、長尾 徹、百田義弘	永末書店
鬼崎信好、 本郷秀和、 荒木剛、今 村浩司、片 岡靖子、島 崎剛、永田 千鶴、畑香 理、古野み はる、松岡 佐智、村山 浩一郎、渡 邊暁	第2章 社会福祉の歩み 2-1日本の社会福祉の歩 み	コメディカルのための社会福 祉概論	13-25, 2023		講談社
田口智章	難治性小児消化器疾患 の医療水準向上および 移行期・成人期のQOL向 上に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (難治性疾患政策研究事業) 令和2年度～令和4年度 総合 研究報告書	2023		
田口智章	難治性小児消化器疾患 の医療水準向上および 移行期・成人期のQOL向 上に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (難治性疾患政策研究事業) 令和4年度 総括・分担研究報 告	2023		
田口智章、 宗崎良太、 武本淳吉	第3章 小児がんにおけ る治療とケア 4. 手術療法（外科治 療）とは	小児がん看護テキストブック	71-74, 2023	上別府圭子 責 任編集、日本 小児がん看護 学会・小児が ん看護テキス ト作成ワーキ ンググループ	株式会社杏林 書院
田口智章	新型コロナの影響で時 間が止まり、魔女狩り の時代に逆戻り？	令和4年度九大医学部籠球部 誌 第45号	2-3, 2023		
馬場篤子	チャレンジ ザ 国試	歯科衛生士 THE JOURNAL OF DENTAL HYGIENIST 47号(4)	105, 2023		クインテッセ ンス出版
力丸哲也	チャレンジ ザ 国試	歯科衛生士 THE JOURNAL OF DENTAL HYGIENIST 47号(5)	99, 2023		クインテッセ ンス出版
中園栄里	チャレンジ ザ 国試	歯科衛生士 THE JOURNAL OF DENTAL HYGIENIST 47号(6)	99, 2023		クインテッセ ンス出版
松尾忠行	4. 歯・口腔の健康と予 防に関わる人間と社会 の仕組み	歯科衛生士国試対策集2024年 対第1～32回全重要問題解説 集	61-73, 93-107	歯科衛生士国 試対策研究会	クインテッセ ンス出版
中園栄里	食生活指導	歯科衛生士国試対策集2024年 対第1～32回全重要問題解説 集	265-278, 2023	歯科衛生士国 試対策研究会	クインテッセ ンス出版

泉喜和子	6. 臨床歯科学 9. 歯科診療補助論	歯科衛生士国試対策集2024年 対応第1～32回全重要問題解 説集	115-207, 225- 353, 2023	歯科衛生士国 試対策研究会	クインテッセ ンス出版
石井綾子	歯科衛生士概論	歯科衛生士国試対策集2024年 対応第1～32回全重要問題解 説集	109-113, 2023	歯科衛生士国 試対策研究会	クインテッセ ンス出版
南レイラ	第32回国家試験問題	歯科衛生士国試対策集2024年 対応第1～32回全重要問題解 説集	374-375, 394- 395, 399, 2023	歯科衛生士国 試対策研究会	クインテッセ ンス出版
後藤加寿子	6. 臨床歯科学 9. 歯科診療補助論	歯科衛生士国試対策集2024年 対応第1～32回全重要問題解 説集	150-158, 319- 325, 2023	歯科衛生士国 試対策研究会	クインテッセ ンス出版
馬場篤子	第2章 治療のベーシックQ&A Q18永久歯の外傷における、治療 時の注意点を教えてください。	子どものお口の発育段階別で 答える 小児歯科のQ&A27	100-105、2023	浜野美幸、岡 暁子、大川玲 奈	デンタルダイ ヤモンド社
馬場篤子	チャレンジ ザ 国試	歯科衛生士 THE JOURNAL OF DENTAL HYGIENIST 47号(7)	95, 2023		クインテッセ ンス出版
力丸哲也	チャレンジ ザ 国試	歯科衛生士 THE JOURNAL OF DENTAL HYGIENIST 47号(8)	101, 2023		クインテッセ ンス出版
田口智章	ミャンマーにおける国 際医療支援の再開	九州大学医学部同窓会誌「学 士鍋」208号	61-63, 2023		
田口智章	「たんぼぼの会結成30 周年特別寄稿」小児外 科疾患の医療費助成制 度	しあわせのたね2-たんぼぼの 会結成30周年記念誌	18-19, 2023	たんぼぼの会	
田口智章	2017年（第44回）学会 長挨拶 第44回日本小 児栄養消化器肝臓学会 「「わ」をもって尊し となす」	日本小児栄養消化器肝臓学会 50周年記念誌	42-43, 2023	一般社団法人 日本小児栄養 消化器肝臓学 会	
田口智章	学会関連のガイドライ ン・指針のサマリー： ヒルシュスプルング病 類縁疾患ガイドライン 2018について	日本小児栄養消化器肝臓学会 50周年記念誌	80-81, 2023	一般社団法人 日本小児栄養 消化器肝臓学 会	

2. 発表論文

著者(全員)	タイトル	雑誌名	Vol(号) : ページ, 2023
<u>Rikimaru T</u> , Okura Y	Intra-oral gingival massage activates human cerebral prefrontal cortex and enhances cognitive performance.	Oral Science International	20(3) : 229-238, 2023
Alatas FS, Masumoto K, Nagata K, Pudjiadi AH, Kadim M, <u>Taguchi T</u> , Tajiri T	Diagnostic challenges of hypoganglionosis based on immunohistochemical method.	Transl Pediatr	12(6) : 1161-1169, 2023
Mori M, Yoshizaki K, Watabe S, Ishige M, Hinoki A, Kondo T, <u>Taguchi T</u> , Hasegawa H, Hatata T, Tanuma N, Kirino K, Hirakawa A, Naruto T, Imai M, Koike R, Hosoi K, Kusuda S	Safety, efficacy and pharmacokinetics of palivizumab in off-label neonates, infants, and young children at risk for serious respiratory syncytial virus infection: a multicenter phase II clinical trial.	Lancet Regional Health Western Pacific	Online, 2023
<u>Kuroki M</u> , Egashira R, Katayama T, Komatsu M, Aoki H, Shoyama S	Harmony between Tooth and Skin Colors -Based on the Impressions of Male Model Faces among Young Males.	J Dent Esthetics	36 (1) ; 19-31, 2023
Yoshimaru K, Matsuura T, Uchida Y, Sonoda S, Maeda S, Kajihara K, Kawano Y, Shirai T, Toriigahara Y, Kalim AS, Zhang XY, Takahashi Y, Kawakubo N, Nagata K, Yamaza H, Yamaza T, <u>Taguchi T</u> , Tajiri T	Cutting edge regenerative therapy for Hirschsprung disease and its allied disorders.	Surgery Today	Online, 2023
Fumino S, Hirohata Y, Takayama S, Tajiri T, Usui N, <u>Taguchi T</u> , Japan SCT Study Group Collaborators	Long-Term Outcomes of Infantile Sacrococcygeal Teratoma: Results from a Multi-institutional Retrospective Observational Study in Japan.	Journal of Pediatric Surgery	Online, 2023
森中恵子、嶋田 香、 <u>南レイラ</u> 、角森照美、寒水章納、山中 富	口腔健康教育ツールの開発と精神科在宅療養者の口腔保健行動の変化	看護と口腔医療	6(1) : 22-37, 2023
<u>川尻 望</u> 、永田華千代、 <u>森沙耶香</u> 、 <u>南レイラ</u> 、 <u>高木未沙稀</u> 、 <u>松尾忠行</u> 、 <u>堀部晴美</u>	妊娠期における口腔保健行動の現状と課題	バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌	24(2) : 9-14, 2023
田中隆行, 西平弥子, 西 憲祐, 横尾嘉宜, <u>泉喜和子</u> , 山野貴史	上下顎移動術後の声帯麻痺に関する検討	耳鼻と臨床	69(6) : 415-418, 2023
晴佐久悟、中島富有子、 <u>黒木まどか</u> 、原 やよい、青木久恵、石塚洋一、眞木吉信	泡状高濃度フッ化物配合歯磨剤の使用が重度精神疾患患者の歯科保健状況に及ぼす影響	口腔衛生学会雑誌	73(3) : 185-196, 2023

3. 学会発表

The 10th Conference of Asian International Association of Dental Traumatology		February 5, 2023, Okayama
Inoue Y	A Case of Facial wounds Caused by Dog bites	
Baba A	A Case of Multiple Tooth Fractures Caused by High-Energy Trauma	
29th IAPD CONGRESS		June 14-17, 2023, Netherlands
Taguchi M, Kato Y, Fujimura R, Hataji S, Tamura S, Oka S, Baba A, Oka K	Long-Term Results of Conservative Treatment for Pediatric Condylar Fracture with Functional Appliance	
12th Global Conference on Consumer Electronics (IEEE)		October, 11, 2023, Nara
Moriyama T, Izumi K	Post-Surgery Evaluation of Facial Muscles and Facial Appearance Using Image Analysis	
令和4年度福岡医療短期大学口腔介護スキルアップ講座特別編新人歯科衛生士スキルアップ講座		
		令和5年3月12日、福岡
田口智章	歯科衛生士に必要な小児科の知識	
井上庸子	口腔機能発達不全症に対するトレーニング	
先端インプラント歯科技術トレーニング研究会第2回学術集会		
		令和5年3月12日、福岡
泉喜和子 (大会長・基調講演者)	これからインプラントに求められることは？ ～加齢に伴う形態・機能について～	
日本生理学会第100回記念大会		
		令和5年3月14日～16日、京都
前芝宗尚、鍛冶屋浩、堤貴司、右田啓介、後藤加寿子、河野祐里、江頭敬、都築尊、大野純	認知症発症における危険因子としての咬合不正の影響	
第60回日本小児歯科学会		
		令和5年5月19日～20日、長崎
中野佑美、馬場篤子、石井華子、熊谷徹弥、柏村晴子、平木昭光、岡 暁子	本学医科歯科総合病院小児口腔外傷センターにおける口腔外傷の臨床統計	
中嶋真理子、馬場篤子、森田浩光、鳥巢浩幸、岡田賢司、小島 寛、岡 暁子	当院小児歯科外来における抗菌薬処方傾向の変化とその後の対策について	
第18回障害者歯科アクティブネットワーク九州2023		
		令和5年6月11日、福岡
岩橋由香、田口雅英、馬場篤子、中嶋真理子、岡 暁子	本学医科歯科総合病院小児口腔外傷センターにおける小児口腔外傷の臨床統計	
第91回日本口腔外科学会 九州支部学術学会		
		令和5年6月24日、宮崎
馬田博之、有田英生、橋本憲一郎、泉喜和子、池邊哲郎	顎矯正手術に際して副腎クリーゼを発症した1例	
第33回新潟周産母子研究会学術講演会		
		令和5年7月22日、新潟
田口智章	新生児外科の進歩と難病対策	
第23回一般社団法人日本外傷歯学会総会・学術大会		
		令和5年7月23日、香川
馬場篤子 (シンポジスト)	シンポジウム 小児口腔外傷センターにおける口腔外傷の臨床統計	
第70回日本栄養改善学会学術総会		
		令和5年9月2日、愛知
中園栄里、齊田直樹、南レイラ、カ丸哲也、古野みはる	反復唾液嚥下テスト (RSST) 低スコアの自立した在宅高齢者がよく飲む飲料の検討	
第33回九州内視鏡・ロボット外科手術研究会		
		令和5年9月9日、福岡
田口智章 (座長)	小児内視鏡外科手術のコツとピットホール	
第65回日本小児血液・がん学会学術集会		
		令和5年9月29日、北海道
濱田 洋、孝橋賢一、日野祐子、玉城昭彦、福原雅弘、川久保尚徳、嘉数真理子、小田義直、田口智章、田尻達郎	ジャパンハートこども医療センターとの小児がん医療連携 -病理診断症例の後方視的検討	

第34回西日本臨床小児口腔外科学会総会・学術大会

令和5年10月15日、沖縄

馬場篤子 (シンポジスト)

シンポジウムⅡ-5 小児歯科医療の現状と課題

日本小児歯科学会第41回九州地方大会

令和5年10月19日、福岡

石井華子、石井 香、葉山康臣、原田 華、大木 調、柏村晴、馬場篤子、岡 暁子

早期産児に観察された形成不全乳歯を管理した3例

立岡迪子、馬場篤子、逢坂洋輔、岡 暁子

歯肉を固定源とした生後10ヶ月児の下顎乳切歯外傷の1例

横田いづみ、柏村晴子、葉山康臣、原田 華、大木 調、柏村晴子、馬場篤子、岡 暁子

早期産児に観察された形成不全乳歯を管理した3例

馬場篤子 (座長)

教育講演・認定歯科衛生士セミナー：小児保健委員会の活動 これまでとこれから (演者：浜野 美幸先生)

第22回福岡医療短期大学公開講座

令和5年10月29日、福岡

力丸哲也

講 演 1 歯周病が及ぼす全身への影響

松尾忠行

講 演 2 口腔内細菌と腸内細菌の関連

田口智章 (座長)

特別講演 腸内細菌叢は寿命を制御する (演者：内藤裕二)

第14回日本歯科衛生教育学会学術大会

令和5年12月2日～3日、東京

松尾忠行、黒木まどか、山本 未陶、晴佐久悟

歯科衛生士学生の社会人基礎力と非認知能力の統計分析による実態の把握 第1報

第34回日本歯科審美学会学術大会

令和5年12月9日～10日、鹿児島

黒木まどか、江頭莉緒、庄山茂子

印象評価に基づく歯と肌の色の色彩調和の検討-男性モデル顔に対する若年女性の評価を用いて-

第50回福岡歯科大学学会総会

令和5年12月10日、福岡

矢田部尚子、島津 篤、松尾忠行、内藤麻利江、藤本暁江、谷口奈央

なぜ喫煙に寛容な歯科衛生士学生がいるのか？

古賀美鈴、井上庸子、北向由紀子、米津博文、赤嶺利紗、杉本清楓、峰 可蓮、後藤加寿子、南レイラ、泉喜和子、手嶋直美、池邊哲郎、田口智章

顎関節症の実態調査と歯科衛生士による指導介入の効果

姫野涼香、熊谷徹弥、吉田真理絵、田村翔悟、柏村晴子、馬場篤子、岡 暁子

舌小帯延長術によって、反対咬合が改善した2症例

山本 繁、鷹取 諄、石井綾子、柏村晴子、山田和彦、畠山純子、柳 絢子、吉田瑞姫、米田雅裕

大黃甘草湯製剤によるPorphyromonas gingivalis増殖阻害

九州大学医学部120周年を祝う会

令和5年12月16日、福岡

田口智章 (座長)

記念講演1 九州大学医学部のこれから (演者：赤司浩一)

4. 獲得研究助成金

厚生労働省科学研究費

研究者	種類	研究課題	金額 (円)
田口 智章	厚生労働科学研究費補助金(難治性疾患等政策研究事業) (代表)	難治性小児消化器疾患の医療水準向上および移行期・成人期のQOL 向上に関する研究	34,760,000
松尾 忠行	厚生労働科学研究費補助金(難治性疾患等政策研究事業) (分担) (研究代表者: 田口智章)	難治性小児消化器疾患の医療水準向上および移行期・成人期のQOL 向上に関する研究	300,000

文部科学省 (日本学術振興会) 科学研究費

研究者	種類	研究課題	金額 (円)
田口 智章	基盤研究B (代表)	乳歯歯髄幹細胞によるヒルシュスプルング病と類縁疾患の病因解明および根治療法の開発	3,250,000
田口 智章	基盤研究B (分担) (研究代表者: 樗木晶子)	学校歯科検診におけるヘルスプロモーションを目指した看護口腔保健プログラムの構築	65,000
松尾 忠行	基盤研究B (分担) (研究代表者: 田口智章)	乳歯歯髄幹細胞によるヒルシュスプルング病と類縁疾患の病因解明および根治療法の開発	100,000
後藤 加寿子	基盤研究C (代表)	軽度認知障害時における咬合不調和の認知症の発症因子としての同定とその機序の探索	1,690,000
後藤 加寿子	基盤研究C (分担) (研究代表者: 都築 尊)	絆ホルモンによる認知機能低下抑制機序の解明 幸せな100年時代の実現	130,000
中園 栄里	挑戦的研究 (萌芽) (代表)	壮年期からの骨粗鬆症予防と口腔機能向上を目指した食事レシピ開発	2,210,000
中園 栄里	挑戦的研究 (萌芽) (代表) (令和元~3年度の1年延長分)	骨質低下を制御するビタミンB群摂取による新たな骨粗鬆症骨折予防の探索的解析	1,963,302
黒木 まどか	基盤研究C (代表)	歯と肌の色から受ける顔印象に基づく性別・年齢別の歯の色選択ツールの開発	780,000
黒木 まどか	基盤研究B (分担) (研究代表者: 樗木晶子)	学校歯科検診におけるヘルスプロモーションを目指した看護口腔保健プログラムの構築	39,000
黒木 まどか	基盤研究C (分担) (研究代表者: 中島富有子)	認知症高齢者の口腔ケア拒絶に対応した脱感作法導入プログラムの多職種共同開発	26,000
秋竹 純	基盤研究C (代表)	有料老人ホーム従事者が捉えるケア実態とストレス状況の考察による虐待防止策の検討	910,000
石井 綾子	基盤研究C (代表)	口臭抑制: 口臭と原因菌の可視化による口腔清掃の動機付け	1,950,000

その他

研究者	種類	研究課題	金額 (円)
泉 喜和子	公益財団法人コーセーコスメトロジー研究財団 (代表)	表情ジワを用いた新たな顔貌定量法 (顔貌解析アルゴリズム) の開発	393,000

Intra-oral gingival massage activates human cerebral prefrontal cortex and enhances cognitive performance

Tetsuya Rikimaru¹ | Yoshifumi Okura^{2,3} 

¹Department of Dental Hygiene, Fukuoka College of Health Sciences, Fukuoka, Japan

²Department of Basic Medical Sciences, Faculty of Medicine School of Nursing, Fukuoka University, Fukuoka, Japan

³Fuzzy Logic Systems Institute, Fukuoka, Japan

Correspondence

Yoshifumi Okura, Fuzzy Logic Systems Institute, Fukuoka, Japan.
Email: okura@flsi.or.jp

Funding information

This study was supported in part by Grants-in-Aid for Scientific Research (KAKENHI) from the Japanese Society for the Promotion of Science (JSPS) (nos. JP23660125 and JP26671027 to YO and nos. JP26671026 and 17K19858 to TR).

Abstract

Aim: Oral care is associated with improved quality of life and changing cognitive performance in daily life. The association of trigeminal nerve-stimulatory oral care methods, such as tooth brushing and intra-oral cold stimuli, with cerebral activation has been studied. This study aimed to elucidate the effects of intra-oral gingival massage on the cerebral prefrontal cortex (PFC) region activation and the changes in cognitive performance.

Methods: A total of 18 men participated in this study. Near-infrared spectroscopy was used to acquire data on the cerebral hemoglobin concentrations. Cognitive function was determined using the Stroop cognitive test performed with and without intra-oral gingival massage stimulus.

Results: Participants who performed intra-oral gingival massage showed significantly increased blood flow in the cerebral PFC region, including the left dorsolateral PFC (DL-PFC) region, compared with those who mimicked the movements of the gingival massage (control group) ($p = 0.0104$ by Wilcoxon signed rank method). Furthermore, gingival massage showed a significant association with increased cognitive performance ($p < 0.0001$ by Wilcoxon signed rank method) that coincided with the enhanced left DL-PFC region activation ($p = 0.039$ by Fisher's exact probability test).

Conclusion: Intra-oral gingival massage activated the cerebral PFC regions correlating with enhanced cognitive performance, suggesting that gingival massage may help improve cognitive performance.

KEYWORDS

cerebral prefrontal cortex, cognitive performance, gingival massage, oral care, trigeminal nerve

1 | INTRODUCTION

Oral care is an interventional method important for improving daily performance, quality of life, and cognitive function in daily life.^{1–3} Previous studies have shown an association between oral care methods and cerebral region activation.^{4,5} Gingival massage is one of the representative oral care methods; however, its effect on cerebral region

activation remains uncertain. The neural signals evoked by oral gingival massage are transmitted via trigeminal sensory nerve branches V2 and V3 to the upper levels of the brain involved in sensory processing (e.g., thalamus, somatosensory cortex, and insula).⁶ Further, previous studies have shown that the activation of the insula and cerebral cortex is recognized based on performing tasks that involve oral functions.^{6,7}

Cerebral prefrontal cortex (PFC) region activation is also shown to be important for neurocognitive functions such as learning and cognitive performances.^{8–10} Previous reports showed that oral care

This study was presented, in part, at the 36th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society.



Diagnostic challenges of hypoganglionosis based on immunohistochemical method

Fatima Safira Alatas^{1,2^}, Kouji Masumoto^{1,3}, Kouji Nagata¹, Antonius Hocky Pudjiadi², Muzal Kadim², Tomoaki Taguchi^{1,4}, Tatsuro Tajiri¹

¹Department of Pediatric Surgery, Reproductive and Developmental Medicine, Graduate School of Medical Sciences, Kyushu University, Fukuoka, Japan; ²Department of Child Health, Faculty of Medicine Universitas Indonesia, Cipto Mangunkusumo Hospital, Jakarta, Indonesia; ³Department of Pediatric Surgery, Faculty of Medicine, University of Tsukuba, Tsukuba, Japan; ⁴Fukuoka College of Health Sciences, Fukuoka, Japan

Contributions: (I) Conception and design: All authors; (II) Administrative support: FS Alatas; (III) Provision of study materials or patients: FS Alatas, K Masumoto, K Nagata; (IV) Collection and assembly of data: FS Alatas; (V) Data analysis and interpretation: FS Alatas, K Masumoto, K Nagata, AH Pudjiadi; (VI) Manuscript writing: All authors; (VII) Final approval of manuscript: All authors.

Correspondence to: Fatima Safira Alatas, MD, PhD. Department of Child Health, Faculty of Medicine Universitas Indonesia, Cipto Mangunkusumo Hospital, Jl. Salemba Raya No. 6, Jakarta 10430, Indonesia. Email: safiraalatas@gmail.com.

Background: Hypoganglionosis resembles Hirschsprung's disease as in both diseases, patients may present with severe constipation or pseudo-obstruction. To date, diagnosis of hypoganglionosis is still difficult to be established due to lack of international consensus regarding diagnostic criteria. This study aims to evaluate the use of immunohistochemistry to provide objective support for our initial subjective impression of hypoganglionosis as well as to describe the morphological features of this study.

Methods: This is a cross-sectional study. Three resected intestinal samples from patients with hypoganglionosis at Kyushu University Hospital, Fukuoka, Japan were included in this study. One healthy intestinal sample was used as control. All specimens were immunohistochemically stained with anti-S-100 protein, anti- α -smooth muscle actin (α -SMA), and anti-c-kit protein antibodies.

Results: (I) S-100 immunostaining: hypoplasia of the myenteric ganglia and marked reduction of intramuscular nerve fibers were observed in several segments of the intestine. (II) α -SMA immunostaining: the pattern of the muscular layers was almost normal in all segments; however, some areas showed hypotrophy of the circular muscle (CM) layers and hypertrophy of the longitudinal muscle (LM) layers. (III) C-kit immunostaining: a decreased in the number of interstitial cells of Cajal (ICCs) was observed in almost all segments of the resected intestine, even around the myenteric plexus.

Conclusions: Each segment of intestine in hypoganglionosis had different numbers of ICCs, sizes, and distributions of ganglions, as well as patterns of musculature, which may range from severely abnormal to nearly normal. Further investigations regarding the definition, etiology, diagnosis, and treatment of this disease should be performed to improve the prognosis of this disease.

Keywords: Enteric nervous system; hypoganglionosis; interstitial cells of Cajal (ICCs); smooth muscle layers

Submitted Nov 14, 2022. Accepted for publication Apr 18, 2023. Published online Jun 01, 2023.

doi: 10.21037/tp-22-592

View this article at: <https://dx.doi.org/10.21037/tp-22-592>

[^] ORCID: 0000-0003-1299-7154.

Safety, efficacy and pharmacokinetics of palivizumab in off-label neonates, infants, and young children at risk for serious respiratory syncytial virus infection: a multicenter phase II clinical trial



Masaaki Mori,^{a,b,*} Kanako Yoshizaki,^c Shinichi Watabe,^c Mika Ishige,^d Akinari Hinoki,^e Takuya Kondo,^f Tomoaki Taguchi,^{f,p} Hisaya Hasegawa,^g Tomoko Hatata,^h Naoyuki Tanuma,ⁱ Kosuke Kirino,^j Akihiro Hirakawa,^k Takuya Naruto,^l Minoru Imai,^m Ryuji Koike,^{m,n} Kenichiro Hosoi,^o and Satoshi Kusuda^o



^aDepartment of Pediatrics, Tokyo Medical and Dental University Medical Hospital, 1-5-45 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo 113-8519, Japan

^bDivision of Rheumatology and Allergy, Department of Internal Medicine, St. Marianna University School of Medicine, Kawasaki, Japan

^cDepartment of Pediatrics, Kurashiki Central Hospital, 1-1-1 Miwa, Kurashiki, Okayama 710-8602, Japan

^dDepartment of Pediatrics and Child Health, Nihon University School of Medicine, 1-6 Kanda Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo 101-8309, Japan

^eDepartment of Rare/Intractable Cancer Analysis Research, Nagoya University Graduate School of Medicine, 65 Tsurumai-cho, Showa-ku, Nagoya 466-8550, Japan

^fDepartment of Pediatric Surgery, Kyushu University Hospital, 3-1-1 Maidashi, Higashi-ku, Fukuoka 812-8582, Japan

^gDivision of Neonatal Intensive Care, Tokyo Women's Medical University, Adachi Medical Center, 4-33-1 Kohoku, Adachi-ku, Tokyo 123-8558, Japan

^hDepartment of Pediatric Surgery, Nagano Children's Hospital, 3100 Toyoshina, Azumino, Nagano 399-8288, Japan

ⁱDepartment of Pediatrics, Tokyo Metropolitan Fuchu Medical Center for the Disabled, 2-9-2 Musashidai, Fuchu, Tokyo 183-8553, Japan

^jDepartment of Data Science, Clinical Research Center, National Center for Child Health and Development, 2-10-1 Ohkura, Setagaya-ku, Tokyo 157-0074, Japan

^kDepartment of Clinical Biostatistics, Graduate School of Medical and Dental Sciences, Tokyo Medical and Dental University, 1-5-45 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo 113-8510, Japan

^lClinical Research Institute, Kanagawa Children's Medical Center, 2-138-4 Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-8555, Japan

^mMedical Innovation Promotion Center, Tokyo Medical and Dental University, 1-5-45 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo 113-8510, Japan

ⁿClinical Research Center, Tokyo Medical and Dental University Hospital, 1-5-45 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo 113-8519, Japan

^oDepartment of Pediatrics, Faculty of Medicine, Kyorin University, 6-20-2 Shinkawa, Mitaka, Tokyo 181-8611, Japan

Summary

Background Pediatric patients with certain rare diseases are at increased risk of severe respiratory syncytial virus (RSV) infection. However, the prophylactic use of anti-RSV antibody (palivizumab) in these patients is not indicated at present in Japan.

Methods This first-in-the-world multicenter, uncontrolled, open-label, phase II clinical trial was carried out between 28 July 2019 and 24 September 2021 at seven medical institutions in Japan to investigate the efficacy, safety, and pharmacokinetics of palivizumab in 23 subjects recruited from among neonates, infants, or children aged 24 months or younger who had any of the following conditions: pulmonary hypoplasia, airway stenosis, congenital esophageal atresia, inherited metabolic disease, or neuromuscular disease. At least four continuous doses of palivizumab were administered intramuscularly at 15 mg/kg at intervals of 30 days.

Findings Twenty-three enrolled subjects completed the study. No subject required hospitalization for RSV. Adverse events (AE) did not notably differ from the event terms described in the latest interview form. Five severe AEs required unplanned hospitalization, but resolved without RSV infection. Therapeutically effective concentrations of palivizumab were maintained throughout the study period.

The Lancet Regional Health - Western Pacific 2023;39: 100847

Published Online xxx
<https://doi.org/10.1016/j.lanwpc.2023.100847>

*Corresponding author. Department of Pediatrics, Tokyo Medical and Dental University Hospital, 1-5-45 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo 113-8519, Japan. E-mail address: mori.phv@tmd.ac.jp (M. Mori).

^pPresent affiliation: Fukuoka College of Health Science, 2-15-1 Tamura, Sawara-ku, Fukuoka 814-0193, Japan.

Trial registration: This study has been prospectively registered in Japan Registry of Clinical Trials (jRCT), which is managed and administered by the National Institute of Public Health (registration number: jRCT2080224862, registration date: September 9, 2019) [<https://jrcr.niph.go.jp/en-latest-detail/jRCT2080224862>].

[原 著]

Harmony between Tooth and Skin Colors

—Based on the Impressions of Male Model Faces among Young Males—

KUROKI Madoka, EGASHIRA Rio¹⁾, KATAYAMA Tetsuya²⁾, KOMATSU Miwako³⁾,
AOKI Hisae⁴⁾ and SHOYAMA Shigeko¹⁾

Department of Dental Hygiene, Fukuoka College of Health Sciences

¹⁾*International College of Arts and Sciences Department of Environmental Science, Fukuoka Women's University*

²⁾*Department of Information Systems, Faculty of Information Systems, Nagasaki Prefectural University*

³⁾*Faculty of Education, Saga University*

⁴⁾*Fundamental Health Nursing, Division of Basic Medical Science and Fundamental Nursing, Fukuoka Nursing College*

(Accepted August 10, 2023)

印象評価に基づく歯と肌の色の色彩調和の検討

—男性モデル顔に対する若年男性の評価を用いて—

黒木まどか 江頭 莉緒¹⁾ 片山 徹也²⁾ 小松美和子³⁾
青木 久恵⁴⁾ 庄山 茂子¹⁾

福岡医療短期大学歯科衛生学科

¹⁾福岡女子大学国際文理学部環境科学科

²⁾長崎県立大学情報システム学部情報システム学科

³⁾佐賀大学教育学部

⁴⁾福岡看護大学基礎・基礎看護部門基礎看護学分野

(2023年8月10日受理)

目的：異なる歯と肌の色を組み合わせた男性モデル顔から受ける印象評価を行い、肌に調和する歯の色を検討した。

方法：男性モデル顔に、歯（0M1, A1, A3, A4）と肌（青白, 美白, 標準, 小麦）の色を組み合わせた16種の画像を、一般成人男性30名（平均30.3±7.8歳）が評価した。

結果：歯と肌の色が最も調和したのは、青白肌は0M1, 美白, 標準, 小麦肌はA1であった。すべての肌の色で、見た目年齢は明度の低い歯の色ほど高かった。因子分析の結果、3因子（外面的魅力, 職務遂行能力, 内面的魅力）が抽出された。3つの因子を満たす肌の色に適した歯の色は、青白肌は0M1とA1, 美白, 標準, 小麦肌は0M1, A1, A3であった。

結論：肌の色に調和する歯の色は、肌の色と同一、または類似のトーンの調和関係にあり、肌の色よりも明度の高い歯の色であった。職務遂行能力は、明度の低い歯の色ほど低く、男性は明るい歯の色ほど職務遂行能力が高いと考えていることが認められた。

キーワード：tooth color（歯の色）, skin color（肌の色）, harmony of colors（色彩調和）, impression of face（顔印象）



Cutting-edge regenerative therapy for Hirschsprung disease and its allied disorders

Koichiro Yoshimaru¹ · Toshiharu Matsuura¹ · Yasuyuki Uchida¹ · Soichiro Sonoda² · Shohei Maeda¹ · Keisuke Kajihara¹ · Yuki Kawano¹ · Takeshi Shirai³ · Yukihiko Toriigahara¹ · Alvin Santoso Kalim¹ · Xiu-Ying Zhang¹ · Yoshiaki Takahashi⁴ · Naonori Kawakubo¹ · Kouji Nagata¹ · Haruyoshi Yamaza⁵ · Takayoshi Yamaza² · Tomoaki Taguchi⁶ · Tatsuro Tajiri¹

Received: 12 May 2023 / Accepted: 6 August 2023
© The Author(s) under exclusive licence to Springer Nature Singapore Pte Ltd. 2023

Abstract

Hirschsprung disease (HSCR) and its associated disorders (AD-HSCR) often result in severe hypoperistalsis caused by enteric neuropathy, mesenchymopathy, and myopathy. Notably, HSCR involving the small intestine, isolated hypoganglionosis, chronic idiopathic intestinal pseudo-obstruction, and megacystis-microcolon-intestinal hypoperistalsis syndrome carry a poor prognosis. Ultimately, small-bowel transplantation (SBTx) is necessary for refractory cases, but it is highly invasive and outcomes are less than optimal, despite advances in surgical techniques and management. Thus, regenerative therapy has come to light as a potential form of treatment involving regeneration of the enteric nervous system, mesenchyme, and smooth muscle in affected areas. We review the cutting-edge regenerative therapeutic approaches for managing HSCR and AD-HSCR, including the use of enteric nervous system progenitor cells, embryonic stem cells, induced pluripotent stem cells, and mesenchymal stem cells as cell sources, the recipient intestine's microenvironment, and transplantation methods. Perspectives on the future of these treatments are also discussed.

Keywords Hirschsprung disease · Allied disorders of Hirschsprung disease · Regenerative therapy · Stem cell therapy · Hypoganglionosis · Chronic idiopathic intestinal pseudo-obstruction

Abbreviations

ENS	Enteric nervous system	MSCs	Mesenchymal stem cells
HSCR	Hirschsprung disease	BM-MSCs	Bone marrow-derived mesenchymal stem cells
AD-HSCR	The allied disorders of Hirschsprung disease	AF-MSCs	Amniotic fluid-derived mesenchymal stem cells
SBTx	Small bowel transplantation	AT-MSCs	Adipose tissue-derived mesenchymal stem cells
IG	Immaturity of ganglia	UCB-MSCs	Umbilical cord blood-derived mesenchymal stem cells
IND	Intestinal neuronal dysplasia	WJ-MSCs	Wharton's jelly derived MSCs
IHG	Isolated hypoganglionosis	DPSCs	Dental pulp stem cells
MMIHS	Megacystis microcolon intestinal hypoperistalsis syndrome	BAC	Benzalkonium chloride
CIIP	Chronic idiopathic intestinal pseudo-obstruction		
CNS	Central nervous system		
CNS-NSCs	Central nervous system-derived neural stem cells		
ENSPCs	Enteric nervous system progenitor cells		
ESCs	Embryonic stem cells		
iPSCs	Induced pluripotent stem cells		

Introduction

The enteric nervous system (ENS) is a major component of the autonomic nervous system [1]. It is a complex network of interconnected neurons and glia, arranged in Auerbach's and Meissner's plexuses within the gut wall. The ENS is known as the "the brain of the gut" or "second brain" because of the

Extended author information available on the last page of the article



Contents lists available at ScienceDirect

Journal of Pediatric Surgery

journal homepage: www.sciencedirect.com/journal/journal-of-pediatric-surgery

Original Article

Long-Term Outcomes of Infantile Sacrococcygeal Teratoma: Results from a Multi-institutional Retrospective Observational Study in Japan

Shigehisa Fumino^{a,*}, Yoshiaki Hirohata^a, Shohei Takayama^a, Tatsuro Tajiri^b, Noriaki Usui^c, Tomoaki Taguchi^d, For and on behalf of Japan SCT Study Group Collaborators^a Department of Pediatric Surgery, Kyoto Prefectural University of Medicine, Kyoto, Japan^b Department of Pediatric Surgery, Reproductive and Developmental Medicine, Graduate School of Medical Sciences, Kyushu University, Fukuoka, Japan^c Department of Pediatric Surgery, Osaka Women's and Children's Hospital, Izumi, Japan^d Fukuoka College of Health Sciences, Fukuoka, Japan

ARTICLE INFO

Article history:

Received 8 November 2023

Accepted 20 November 2023

Keywords:

Sacrococcygeal teratoma
Long-term complications
Anorectal dysfunction
Urinary dysfunction
Tumor recurrence

ABSTRACT

Background: Tumor recurrence, anorectal and urinary dysfunction, and lower limb dysfunction after surgery are observed in infantile sacrococcygeal teratoma (SCT). In this paper, a multi-institutional retrospective observational study was conducted to clarify the long-term functional prognosis in Japan.**Methods:** This study was conducted using a paper-based questionnaire distributed to 192 facilities accredited by the Japanese Society of Pediatric Surgeons, covering patients who underwent radical surgery at less than 1 year old and who survived for at least 180 days after birth from 2000 to 2019.**Results:** A total of 355 patients were included in this analysis. Altman type was I-II in 248 and type III-IV in 107, and the median maximum tumor diameter was 6.1 (range: 0.6–36.0) cm. There were 269 mature teratomas, 69 immature teratomas, and 10 malignant tumors. Total resection was performed in 325, subtotal or partial resection in 27, and surgical complications were noted in 54. The median postoperative follow-up was 6.6 (0.5–21.7) years. Eighty-three patients (23.4 %) had functional sequelae, including 62 (17.5 %) with anorectal dysfunction, 56 (13.0 %) with urinary dysfunction, and 15 (4.2 %) with lower limb motor dysfunction. Recurrence occurred in 42 (11.8 %) at a median age of 16.8 (1.7–145.1) months old. Risk factors for dysfunction included preterm delivery, a large tumor diameter, Altman type III-IV, incomplete resection, and surgical complications. Risk factors for recurrence included immature teratoma or malignancy, incomplete resection, and surgical complications.**Conclusions:** Postoperative dysfunction was not low at 23.4 %, and 11.8 % of the patients experienced recurrence occurring more than 10 years after surgery, suggesting the need for periodic imaging and tumor markers evaluations in patients with risk factors. It is necessary to establish treatment guidelines for best practice monitoring of the long-term quality of life.**Level of evidence:** Level II Retrospective Study.

© 2023 Elsevier Inc. All rights reserved.

1. Introduction

Sacrococcygeal teratoma (SCT) is an uncommon extragonadal germ cell tumor in neonates, infants, and toddlers. This lesion consists of a solid and/or cystic component that develops from the

tip of the sacrum, protruding outward from the buttocks, or within the pelvic cavity. The incidence of SCT is estimated to be 1 in every 40,000 births, and the male-to-female ratio is approximately 1:3, being more frequent in girls than in boys. Most cases are diagnosed at birth, and yolk sac tumors (YSTs) occur more frequently in children after infancy more than neonates [1].

Although most cases of infantile SCT are benign tumors in nature, including mature or immature teratomas with an excellent prognosis, some develop into extremely large lesions, leading to massive bleeding, high-output heart failure, and disseminated intravascular coagulopathy (DIC), and fatal outcomes during the neonatal period. In addition, even after successful tumor resection, some patients may present with tumor recurrence, malignant

Abbreviations: SCT, Sacrococcygeal Teratoma; QOL, Quality of Life; CIC, clean intermittent catheterization; DIC, disseminated intravascular coagulopathy; YST, yolk sac tumor; CNS, central nervous system; OR, odds ratio; CI, confidence interval; AFP, alpha-fetoprotein.

* Corresponding author. Shigehisa Fumino, Department of Pediatric Surgery, Kyoto Prefectural University of Medicine, 465 Kawaramachi-Hirokoji, Kamigyo-ku, Kyoto, 602-8566, Japan. Tel.: +81 75-251-5809; fax: +81 75-251-5828.

E-mail address: fumin@koto.kpu-m.ac.jp (S. Fumino).

<https://doi.org/10.1016/j.jpedsurg.2023.11.016>

0022-3468/© 2023 Elsevier Inc. All rights reserved.

口腔健康教育ツールの開発と精神科在宅療養者の口腔保健行動の変化

Development of a Tool for Oral Health Education and Change of Oral Health Behavior in Psychiatry Home Care Patients

森中恵子¹⁾ 嶋田香²⁾ 南レイラ³⁾ 角森輝美⁴⁾ 寒水章納⁴⁾ 山中富⁴⁾

1)元 福岡看護大学 看護学部 看護学科 地域在宅看護部門、2)群馬大学 情報学部

3)福岡医療短期大学、4)福岡看護大学 看護学部 看護学科 地域在宅看護部門

抄 録

本研究は精神科在宅療養者を対象とし、口腔歯科保健に関心を持ち保健予防行動を目指した口腔健康教育ツールを開発し、対象者の口腔保健行動の変化を明らかにすることを目的とした介入研究である。

口腔健康教育ツールは、質問調査と健康教育が同時にできる一体型アプリを搭載したタブレットを用いて、口腔内の細菌増殖やブクブクうがい、および正しい歯磨き方法の動画を作成した。訪問看護スタッフにタブレットの使用方法を研修後、調査を初回訪問面接と2か月後に訪問面接で実施し、その結果から対象者の保健行動を比較し分析した。

対象者の口腔保健行動の変化は、歯磨き回数は介入前後で変化はなかったが、朝と夜の時間帯が増加した。また、歯の健康で良好と回答した者は介入前よりも介入後が有意に増加した($p=0.029$)。間食回数は介入前より介入後に有意に減少した($p=0.027$)。口腔内自覚症状は、気になることは無しが6.5%(介入前)から45.2%(介入後)へ増加し、歯茎の出血は51.6%(介入前)から3.2%(介入後)へ減少した。対象者は動画視聴により歯の健康の重要性を認識して改善し、今後も継続指導を望むなど、口腔保健に対する意識が高まったと考える。

今後の課題は、訪問看護の利点を活かした、対象者が自発的に学習できるステップアップ方式の継続型ツールを開発し、訪問看護スタッフが参加できる歯科口腔保健研修機会の提供が必要である。

キーワード：訪問看護ステーション、精神科在宅療養者、口腔健康教育ツール、歯科口腔保健、口腔保健行動

緒 言

精神疾患患者の大部分は、病歴も長く治期間も長期にわたるため、その病状や治療薬の副作用により、口腔内粘膜の異常や歯周病への懸念が強く、惹いては口腔機能低下や摂食嚥下障害をおこす危険性がある¹⁾。抗精神病の副作用として、自律神経への影響による唾液分泌抑制が続き、口腔乾燥のために齲歯・歯周病にり患しやすいとされている²⁾。しかしながら精神疾患の病状により、歯科受診に対する不安や恐怖感を訴える者も多く、受診が難しい傾向にある。

2008年に在宅等での口腔ケアを含む歯科診療の推進を目的に「在宅療養支援歯科診療所」が創設されたが、訪問看護ステーションからの歯科の訪問診療の依頼は少なく、訪問看護師と歯科専門職との連携が取れてないという調査結果^{3,4)}がある。特に、精神疾患患者については、口腔ケアの重要性⁵⁾が認識されており、認知症の誤嚥性肺炎の予防にも有効であることが先行研究⁶⁾で立証されている。精神科在宅療養者に対する口腔保健の研究は少なく、口腔保健に対して積極的な取り組みがない現状がある。

妊娠期における口腔保健行動の現状と課題

川尻 望¹, 永田華千代², 森 沙耶香¹, 南 レイラ¹, 高木未沙稀¹, 松尾忠行¹, 堀部晴美¹

1) 福岡医療短期大学 歯科衛生学科 2) 福山平成大学 看護学科

要約: 本研究は、妊娠期における口腔保健行動の現状を把握し、妊婦と胎児の口腔状態を良好に保つために必要な課題について探索する。妊娠期の口腔保健の必要性は母子健康手帳に助成券付きで掲載されているが、十分な活用がされていない。しかし子どもの口腔保健管理は、胎児期から始まるため、妊娠中から口腔保健行動への意識付けを行い、産褥期・育児期まで継続した取組が必要である。そこで、妊娠期における口腔保健行動の現状把握を目的として自記式質問紙調査を実施し、有効回答率32名のデータを得て分析を行った。その結果、妊娠前からの歯科定期検診習慣、補助的清掃用具の使用、齲蝕・歯周病予防指導経験の項目にて、かかりつけ歯科医院の有無と有意差が認められた。つまり、産前からかかりつけ歯科医院を持ち、歯科検診を習慣づけることの重要性が明らかとなった。また、妊婦歯科健康診査の受診を促進するためには、妊婦が最も密に関わる産科医師・助産師を対象に、口腔保健行動の重要性について講習会を開催するなど、多職種連携が必要である。

キーワード: 妊婦歯科健康診査, 口腔保健行動, 歯科保健指導, かかりつけ歯科医院

Current Oral Health Behaviors in Pregnancy

Nozomi KAWASHIRI¹, Hanachiyo NAGATA², Sayaka MORI¹, Reira MINAMI¹,

Misaki TAKAKI¹, Tadayuki MATSUO¹, Harumi HORIBE¹

1) *Department of Dental Hygiene, Fukuoka College of Health Sciences*

2) *Nursing department, Fukuyama Heisei University*

Abstract: This study aims to understand the current status of oral health behaviors during pregnancy and to explore issues necessary to maintain good oral health for pregnant women and their fetuses. The need for oral health care during pregnancy is listed in the Maternal and Child Health Handbook with a grant certificate, but it is not fully utilized. However, because oral health management of children begins in the fetal period, it is necessary to raise awareness of oral health behaviors during pregnancy, and to continue efforts until the postpartum period and child-rearing period. Therefore, a self-administered questionnaire survey was conducted to understand the current status of oral health behaviors during pregnancy, and data from 32 valid responses were obtained and analyzed. The results showed that there was a significant difference between the presence or absence of a family dentist and the presence or absence of a family dentist in the items of habit of regular dental checkups before pregnancy, use of supplementary cleaning tools, and experience of dental caries and periodontal disease prevention guidance. In other words, the importance of having a family dentist and practicing dental checkups before childbirth became clear. In addition, in order to promote the attendance of pregnant women for dental health examinations, it is necessary to collaborate with multiple professions, such as by holding seminars on the importance of oral health behavior for obstetricians and midwives, with whom pregnant women are most closely involved.

Keywords: *Pregnancy dental health examination, oral health behavior, dental health guidance, family dentist*

Nozomi KAWASHIRI

2-15-1, Tamura Sawara-ku, Fukuoka 814-0193, Japan

Phone: +81-92-801-0411, E-mail:kawashiri@fdcn.ac.jp

原 著

上下顎移動術後の声帯麻痺に関する検討

田中 隆行 ・ 西平 弥子 ・ 西 憲祐*
横尾 嘉宜** ・ 泉 喜和子*** ・ 山野 貴史*

上下顎移動術は顎変形症に対して行われる手術であり、術後声帯麻痺についての報告はあるが、その原因や頻度に関しては明らかになっていない。われわれは上下顎移動術後の声帯麻痺の頻度を統計学的に解析し、原因を考察した。当院口腔外科にて上下顎移動術を受けた133例を後ろ向きに解析した。133例のうち13例(9.8%)に術後声帯麻痺を認めた。改善率は100%であった。全身麻酔手術全体の術後声帯麻痺に関する諸家の報告では0.03-0.2%であり、上下顎移動術後の声帯麻痺の頻度が高いことが示された。加えて、術後嘔声を訴える症例20例のうち6例に喉頭肉芽を認めた。手術操作により挿管チューブが移動することで喉頭への機械的刺激が大きい手術であることが考えられる。また、下咽頭、喉頭粘膜下血腫を認める症例もあり、反回神経、周囲組織の圧迫や反回神経栄養血管が圧迫され低灌流となり声帯麻痺を来したと考える。今後、本術式の合併症の一つとして医科歯科に周知していく必要がある。

キーワード：術後声帯麻痺、上下顎移動術

はじめに

上下顎移動術は顎変形症に対して主に咬合調整、整容を目的として行われる手術である。ルフォーI型骨切り術(Le Fort I)は梨状口を横切り、後方翼状突起まで水平に切除し、上顎歯を一塊に移動させる。下顎枝矢状分割術(SSRO)は下顎角部を外側と内側に分け、下顎歯を一塊に動かす。両術式を組み合わせることで咬合調整を行う。上下顎移動術後に声帯麻痺を起こす症例が多かったことが他施設にて報告されている¹⁾。しかしながら頻度は統計学的に明らかになっておらず、麻痺の原因も分かっていないことが多い。

今回、当院における上下顎移動術後の声帯麻痺の頻度および、麻痺の原因を同定することを目的とし解析を行った。

対象と方法

福岡歯科大学病院歯科口腔外科において2019年9月-2022年7月に実施した上下顎移動術について後方視的に統計をとり、症例対象研究を行った。同期間で上下顎移動術は133例であった。当科に嘔声、咽頭違和感にて紹介となった症例全例に喉頭内視鏡を使用し声帯を観察した。術後、声帯固定を認めるものを術後声帯麻痺と定義した。

結 果

対象症例133例。男性36例、女性97例、平均年齢26.4歳(17-55歳)であった。全例経鼻挿管され、手術時間は平均246.6±61.7分であった。全例挿管管理が行われた。声帯麻痺は13例(9.8%)で認めた。左7例、右6例であった。全例傍正中固定であり、脱臼は認めなかった(図1)。

__福岡歯科大学総合医学講座耳鼻咽喉科学分野、**福岡歯科大学口腔顎顔面外科学講座口腔外科学分野、***福岡医療短期大学
*別刷請求：〒814-0193 福岡市早良区田村2丁目15-1 福岡歯科大学総合医学講座耳鼻咽喉科学分野 田中隆行

原 著

泡状高濃度フッ化物配合歯磨剤の使用が 重度精神疾患患者の歯科保健状況に及ぼす影響

晴佐久 悟¹⁾ 中島富有子¹⁾ 黒木まどか²⁾ 原 やよい¹⁾
青木 久恵¹⁾ 石塚 洋一³⁾ 眞木 吉信⁴⁾

概要：本研究の目的は、重度精神疾患入院患者の歯科保健状況を把握し、泡状高濃度フッ化物配合歯磨剤（以下、泡状 HF 歯磨剤）の使用が、その患者の口腔衛生、歯科疾患、および口腔症状に及ぼす影響を確認することである。

対象は某精神病院に入院する 52 名の重度精神疾患患者であり、泡状 HF 歯磨剤を 3 か月使用する群（介入群）と使用しない群（対照群）に分類した。対象者の歯科保健状況と泡状 HF 歯磨剤使用の効果を確認するために、歯科保健行動に関する質問紙調査、歯の検査、前歯部唇面の歯垢および歯肉炎の検査、および湿潤度の検査を介入前後に実施した。

46 名（男性 23 名、女性 23 名、平均年齢 62.3±10.5）が介入前調査に参加した。11% が歯磨き未実施、歯磨剤未使用であった。平均未処置歯数は 2.0±2.5 本であり、91% が前歯部唇面に歯垢および歯肉炎を有し、15% が口腔乾燥を有していた。

41 名（介入群 18 名、対照群 23 名）が介入前後の歯科保健状況の調査に参加した。介入群では、歯垢および歯肉炎の状況が改善したが、対照群では、それらの改善は認められなかった。

以上により、重度精神疾患入院患者の歯科保健状況は悪く、歯科疾患の予防対策の必要性が明らかになった。また、泡状 HF 歯磨剤の使用により、それらの患者の口腔衛生状況、歯肉炎への改善効果が認められた。今後、泡状 HF 歯磨剤のう蝕予防効果を確認するための更なる研究が必要である。

索引用語：フッ化物、歯磨剤、重度精神疾患患者、口腔ケア、介入研究

口腔衛生会誌 73：185-196, 2023

(受付：令和 5 年 1 月 14 日/受理：令和 5 年 6 月 1 日)

緒 言

わが国では、精神および行動の障害による入院患者数は 25 万 2 千人であり^{*1}、傷病分類別にみると最も多い。過去の研究では、精神疾患入院患者は、健常者と比較して歯科疾患の罹患率が高く、その需要も多かったが、歯科医療サービスは十分提供されていないと報告されている¹⁾。また、精神疾患入院患者は、歯磨き等の保健行動レベルが低いこと²⁾や入院期間中にう蝕が増加したこと³⁾などが報告され、入院中の歯科保健の問題点が指摘されている。特に重度精神疾患患者は、重度の歯科疾患を有する傾向があり、認知機能の低下や歯科治療の拒否により、適正な歯科治療の提供ができないことが報告されており⁴⁾、歯科疾患の更なる重症化や新規発生を予

防する方策が必要であると考えられる。

近年、歯の寿命の延伸により、高齢者のう蝕、歯周病は増加傾向にある⁵⁾。う蝕および歯周病は、歯を失う主原因で⁶⁾、口腔機能の低下、フレイルの発症に影響を及ぼすことが明らかになっている⁷⁾。さらに、歯周病は糖尿病や脳血管疾患、低体重児早産などの発症に影響を及ぼすことも報告されている⁸⁻¹⁰⁾。精神疾患入院患者も高齢化していることから¹⁾、精神疾患入院患者のう蝕、歯周病の予防対策はますます重要になると考えられる。

フッ化物配合歯磨剤の使用は、口腔ケアの一手段としてう蝕予防に有効である¹¹⁾。近年、フッ化物濃度 1,450 ppm の泡状高濃度フッ化物配合歯磨剤（以下、泡状 HF 歯磨剤）が市販された。フッ化物濃度 1,450 ppm のフッ化物配合歯磨剤は、通常に含まれるフッ化物濃度

¹⁾ 福岡看護大学看護学部

²⁾ 福岡医療短期大学歯科衛生学科

³⁾ 東京歯科大学衛生学講座

⁴⁾ 東京歯科大学

^{*1} 厚生労働省：平成 29 年（2017）患者調査の概況。https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/17/dl/01.pdf（2023 年 1 月 4 日アクセス）。

II. 学位取得者

5. 学位取得者

黒木まどか

2023年3月 福岡女子大学大学院 人間環境科学研究科

人間環境科学専攻 博士後期課程修了

博士（人間環境科学）取得

印象評価に基づく歯と肌の色の色彩調和の検討

Harmony between Tooth and Skin Colors based on Impression
evaluation

論文名：印象評価に基づく歯と肌の色の色彩調和の検討

黒木 まどか

論文内容の要旨

わが国では、歯科疾患の予防が推進されたことにより、人々の歯と口腔は、健康な状態に向上している。その結果、人々の歯と口腔の健康に対する欲求は、歯の痛みや食事を噛めないなどの生活上の障害に対するものから、健康の維持へ移行し、さらに健康で美しい口元に自分らしさを求めるなど、より高次になっている。現在、審美的側面の歯科医療では、歯並びや歯の色など口元の美しさに対する診療がなされているが、今後さらに、審美的側面に対する歯科医療の欲求が高まることが推測される。先行研究では、歯の色に悩みを抱える人が多く、人々は白い歯の色に好感を持つことが明らかにされているが、白すぎる歯の色は、不自然に見えるとの指摘もなされている。歯科医療従事者は、歯の色の選択に課題を抱えていることが示されているため、歯科医療の歯の色の選択の効率性と信頼性の向上が求められる。また、顔の印象は、肌の色から受けるイメージが大きく関わるということが認められている。

そこで本研究では、歯の色と肌の色の色彩調和に着目し、一般成人および歯科医療従事者を対象に審美歯科診療の実態を調査し、その結果をふまえ、異なる歯の色と肌の色との組み合わせから受ける顔印象を調査し、人々や歯科医療従事者が歯の色を選択する場面で指標となる基準を明らかにすることを目的とした。

第2章では、人々の歯科受診の実態を明らかにすることを目的に、20～69歳の一般成人男女を対象に、歯科受診についてインターネット調査を行い、206名から回答を得た。歯科受診の目的は、主に歯・口の痛みなどの機能的側面の回復であった。審美的側面で歯科受診する割合は、女性の方が男性よりも高かった。90%以上の男女は、前歯の黄ばみに不満を持

っていた。人々の口元の不満や悩みは審美的側面に起因していることから、今後、審美歯科診療の重要性が高まることが示唆された。

第3章では、歯科医療従事者の審美歯科診療の実態を明らかにすることを目的に、歯科衛生士を対象に、審美歯科診療についてインターネット調査を行い、100名から回答を得た。患者の審美歯科診療に対するニーズは、クリーニング、歯冠修復物（レジン、ジルコニアなど）、ホワイトニングの順に高く、75%が歯の色の選択に関わっていた。その内64%は、歯の色の選択は難しいと回答し、歯の色を客観的に選択する指標を求めていたことから、歯の色の選択基準の検討の必要性が示唆された。

第4章では、人々の肌の色に調和する歯の色を検討することを目的に、20～39歳の一般成人女性30名を対象に、4色の歯の色（VITAクラシカルシェード：0M1、A1、A3、A4）と4色の肌の色（青白、美白、標準、小麦）を組み合わせた16種類の女性モデル顔画像を提示し、歯と肌の色の組み合わせに対する調和・不調和、および22項目のイメージを調査した。なお、画像の歯の色のマンセル値は、0M1（4.3Y8.5/0.6）、A1（2.1Y6.1/1.3）、A3（0.7Y6.5/2.3）、A4（9.8Y5.3/2.9）である。その結果、青白肌は0M1（90.0%）、美白肌は0M1（60.0）、標準肌は0M1（43.3%）、小麦肌はA3（63.3%）が最も調和する歯の色として回答された。因子分析の結果、「内面的魅力・外面的魅力」、「快活な魅力」の2因子が抽出され、2因子とも16種類の平均因子得点に有意差がみられた（ $p < 0.001$ ）。2因子を満たし、各肌の色に調和する歯の色は、青白肌では0M1、美白肌では0M1、A1、標準肌と小麦肌では0M1、A1、A3であった。各歯の色に調和する肌の色は、0M1ではすべての肌の色、A1、A3では美白、標準、小麦肌であり、A4に調和する肌の色はなかった。

第5章では、汎用性の高い歯の色の選択基準を検討することを目的に、第4章と同様の調査を20～39歳の一般成人男性30名を対象に実施し、男女間の差異を検証した。その結果、イメージに男女差がみられたのは、美白肌に0M1、標準肌にA4、小麦肌にA4を組み合わせた画像で、女性の方が男性よりも明るい歯の色を高く評価し、暗い歯の色を低く評価した。因子分析の結果、「内面的魅力・外面的魅力」、「快活な魅力」の2因子が抽出され、2因子ともに32種類の平均因子得点に有意差がみられた（ $p < 0.001$ ）。しかし、2因子ともに歯と肌の色が同じ画像間で男女の平均因子得点に有意差はみられなかった。2因子を満たし各肌の色に調和する歯の色は、男女ともに、青白肌では0M1、美白肌と標準肌では0M1、A1、A3、小麦肌では0M1、A3であった。2因子を満たし各歯の色に調和する肌の色は、男女ともに、0M1ではすべての肌の色、A1とA3では美白、標準、小麦肌であり、A4に調和する肌の色はなかった。

以上のことから、肌の色に調和する歯の色は、肌の色と同一トーンの調和又は類似トーンの調和関係にある色であり、肌の色よりも明度の高い歯の色であり、男女ともに共通していた。この結果は、歯科医療従事者が、若年女性の歯の色を選択する診療の際に指標として活用できると考えられる。しかし、天然歯は加齢とともに明度が減少し赤味、黄色みが増す傾向にあり、審美に関する意識は世代により異なることから、今後は、異なる世代の女性モデルや男性モデルに対し、異なる世代を対象に調査し、検証する必要がある。

Ⅲ. 抄読会記録

2023/1/31	力丸教授	Interaction between serum vitamin C levels and smoking on the periodontal condition in older adults
		Yoshihara A, Nakashima K, Suwama K, Odajima A, Yamaga T, Ogawa H J Periodont Res. 2022; 57:587-593.
		いくつかの疫学研究では、喫煙者は非喫煙者よりも歯周病の有病率と重症度が高く、喫煙は栄養状態に悪影響を及ぼし、抗酸化物質、特にビタミンCの摂取量の減少に関連していることが報告されている。本調査の目的は、血清ビタミンC濃度と喫煙との関連および高齢者の歯周病への影響を検討することである。 血清コチニン濃度が高い(≥100 ng/ml)または低い(<100 ng/ml)参加者間の血清ビタミンC三分位のPRRの違いを、性別、歯間ブラシまたはデンタルフロスの使用、および歯数を調整した後に評価した。PPDまたはCALのビタミンC三分位のPRRの間には、両方のグループで負の傾向が見られた。特に、血清コチニン値が高い群では大きな差が見られた。高血清コチニン群の最初の三分位動物のPRRは5.03であったのに対し、低血清コチニン群では2.69であった(相対リスク:1.9)。この研究の結果は、ビタミンCレベルと歯周状態との潜在的な関連を示唆しており、喫煙状態の影響を受ける可能性がある。
2023/2/28	古野教授	Relationship between Degree of Independence in Daily Activities and Denture Wearing Status of Residents of Special Nursing Homes for Elderly Persons
		Saijo M, Takeshita A, Matsumoto M, Fukai T, Irie K, Kita K, Ono Y, Maruyama Y, Yasui T J Dent Hlth 71: 147-152, 2021
		Department of Community Health Sciences, Meikai University, School of Dentistry
		施設入居高齢者において、要介護度や日常生活自立度と義歯の装着状況の関連性の実態を把握するために、これらの基礎的データを得ることとした。特別養護老人ホームに入居する高齢者のうち義歯を必要とする80名を対象として、全身状態に関する項目および口腔の状態に関する項目について調査を行い、義歯使用状況との関連をχ ² 検定およびFisher直接確率法を用いて検討した。 入居者の義歯使用状況は、要介護度、食事形態、義歯着脱の自立度、うがいの可否、歯みがきの自立度(p<0.01)、Eichner分類(p<0.05)との相関が見いだされた。 義歯必要者のうち、義歯使用者は口腔に関する自立度が高いだけでなく、生活面での自立度が高いことが示された。
2023/3/30	石井講師	COVID-19 Pandemic: Effect of Different Face Masks on Self-Perceived Dry Mouth and Halitosis
		Philipp Kanzow, Viktoria Dylla, Alannah Malina Mahler, Valentina Hraskey, Tina Rödiger, Felix Barre, Simone Scheithauer, Annette Wiegand Int J Environ Res Public Health. 2021 Aug 31;18(17):9180
		COVID-19の流行によりフェイスマスクの着用が増加し、健康上の副作用が懸念されている。本研究では、マスクの着用がドライマウスおよび口臭に及ぼす影響を分析することを目的としました。 大学病院に通院または勤務する成人を対象に各種マスクの一日の装着時間とドライマウス・口臭に関するアンケートを実施した。フェイスマスクの使用は、ドライマウスと口臭を有意に増加させた(p<0.001)。ドライマウスと口臭の自覚は、着用時間の増加とともに増加した。また、男性と比較して女性で増加しました(両方ともp<0.043)。パンデミック以前にフェイスマスクを着用していた参加者は、口渇をより高く感じていました。口臭の自覚は、若年参加者よりも高齢で低かったです。さらなる研究では、口渇または口臭の測定可能な変化を分析する必要があります。
2023/4/26	黒木講師	Regular dental visits, periodontitis, tooth loss, and atherosclerosis: The Ohasama study
		Yamada S, Komiyama T, Ohi T, Murakami T, Miyoshi Y, Endo K, Hiratsuka T, Hara A, Satoh M, Tatsumi Y, Inoue R, Asayama K, Kikuya M, Hozawa A, Metoki H, Imai Y, Ohkubo T, Hattori Y. J Periodont Res. 2022 Jun;57(3):615-622.
		Division of Aging and Geriatric Dentistry, Department of Rehabilitation Dentistry, Tohoku University Graduate School of Dentistry, Sendai, Japan
		Abstract: 日本の地域住民を対象に、歯科定期受診とアテローム性動脈硬化の関連、および歯周炎、残存歯数、アテローム性動脈硬化の関連について検討することを目的とした。 大迫町に住む55歳以上の地域住民を対象に、歯科定期受診、歯周炎(X線写真による歯槽骨吸収率(BL))、CDC/AAP分類、残存歯数を調査した。主要評価項目は動脈硬化で、最大頸動脈内中膜厚(IMT) 1.1mm以上、またはアテローム性プラークの確認と定義した。 602人の参加者のうち、117人がアテローム性動脈硬化症であった。多変量解析において、歯科定期受診ありと比較して、歯科定期受診なしの動脈硬化のオッズ比(OR)(95%信頼区間[CI])は、2.16(1.03-4.49)であった。BL-maxは、第1四分位群に比べ、第2、第3、第4四分位群のOR(95%CI)はそれぞれ1.15(0.65-2.30)、0.65(0.32-1.35)、1.57(0.81-3.01)であった。CDC/AAP分類は、歯周炎がない人または軽度の人と比べ、中等度および重度の歯周炎を持つ人のOR(95%CI)は、それぞれ2.48(0.61-10.1)および4.26(1.01-17.5)であった。残存歯数は、20本以上と比較して、10~19本と1~9本のOR(95%CI)はそれぞれ1.77(1.004~3.12)、0.96(0.52~1.80)であった。 歯科定期受診の欠如と歯周炎の存在は、日本の地域住民のアテローム性動脈硬化と関連していることが示された。

2023/5/16	中園講師	Relationship between Fried's frailty phenotype and oral frailty in long-term care residents	
		Kaija Hiltunen, Riitta K.T. Saarela, Hannu Kautiainen, Hanna-Maria Roitto, Kaisu H. Pitkälä, Päivi Mäntylä.	Age Ageing. 2021 Nov; 50(6): 2133-2139.
		Department of Oral and Maxillofacial Diseases, University of Helsinki, Helsinki, Finland	
		<p>オーラルフレイル(OFr)は、その定義に関するコンセンサスを欠いている症候群と呼ばれることがある。この研究は、OFrと長期介護におけるフレイル、全身の健康、栄養の表現型との関係を証明することを目的とした。</p> <p>FINnishオーラルヘルス研究は、口腔および全身の健康と栄養に関する調査を含む横断的な臨床研究で、フィンランドの長期介護施設の高齢者349人を対象とした。フレイル状態は、フリードのフレイル表現型によって定義された。OFrは、①ドライマウス、②ビューレ（裏ごし）または柔らかい食品での食事、③口腔表面の食品の残渣、④不明瞭な発語、⑤臨床的口腔検査中に口を開けておくことができない、⑥検査中の痛みの6つの兆候で評価した。研究対象者は、OFrのサイン(兆候)の数に応じてグループ1 (0~1サイン)、グループ2 (2~4サイン)、およびグループ3 (5~6サイン)に分けた。</p> <p>フリードのフレイル表現型を持つOFrグループの間で有意な線形関係が見つかった(性別と年齢で調整後の線形性P = 0.008)。OFrグループと全身の健康には直線的な傾向関係があった。認知症と栄養失調の有病率、および食事介助と口腔衛生の手順の介助が必要な人は、グループ1からグループ3で増加した。さらに、OFrは咀嚼および嚥下困難と線形関係があった。</p> <p>OFrはフリードのフレイル表現型、全身の健康、栄養と関連している、そして日常活動の介助の必要性とも関連していた。</p>	
2023/6/30	秋竹講師	Abuse and risk factors among community-dwelling elderly in South Korea during COVID-19	
		Yoon Hee Son , Myong Sun Cho	Journal of Elder Abuse & Neglect. 2022, VOL. 34, NO. 4, 259-279
		College of Nursing, Ewha Womans University, Seoul, South Korea; bDepartment of Nursing, Gangneung Wonju National	
		<p>韓国では高齢者虐待が深刻な社会問題になっている。この研究の目的は、2019年のコロナウイルス病 (COVID-19) パンデミック時の高齢者虐待の有病率を推定し、リスク要因を特定することであった。2020年ソウル特別市の高齢者の生活プロフィール調査を使用し、社会人口学的、健康関連、社会的支援、および孤立要因を独立変数として考慮することにより、ロジスティック回帰モデルが確立された。3,106のサンプルのうち、高齢者虐待の全体的な割合は8.5%で、精神的虐待が最も頻繁であった。社会的孤立 (OR = 1.47, p = .018) および虐待の認識 (OR = 0.90, p = .003) は、虐待の経験と関連していた。病気の数が多く、依存度が高く、抑うつ症状や認知障害のある高齢者は、虐待を受ける可能性が高く、喫煙者や飲酒者も同様であった。COVID-19中およびCOVID-19後の社会的孤立による高齢者虐待を防ぐために、より積極的な健康増進プログラムと健康的な老化政策を実施する必要があるといえる。</p>	
2023/8/30	南講師	Relationship between Knowledge and Attitude toward Oral Function in Middle-Aged and Older Adults	
		Nakata H, Masaki Y, Watanabe Y, Ohkubo M, Sugiyama T, Kobayashi K	International Journal of Dentistry Volume 2022, Article ID 3503644, 1-9.
		Department of Dental Hygiene, Tokyo Dental Junior College, Kobayashi Dental Clinic	
		<p>口腔機能に対する知識や態度は、口腔機能の維持と改善に影響を与える可能性がある。そこで、(1) 口腔機能に対する知識・態度と口腔機能低下との関係性、(2) 評価と教育を通じて口腔機能に対する知識と態度の変化を検討することを目的とした。</p> <p>50歳以上の中高年者63名を対象に、口腔機能低下症の7つの基準の口腔機能 (ORF) の評価を実施した。その評価の前後で口腔機能に関するアンケート評価を実施し、ORFの評価と口腔機能または健康に対する知識と態度 (KAOF) の変化の関連性を分析した。</p> <p>KAOFが低い中高年者は、ORFが悪化する可能性が高くなるが、KAOFはORFの評価と教育によって改善される可能性が示唆された。これらの結果は、ORFの低下やフレイルを予防するためには、若い頃から病歴や栄養状態などの全身状態、噛み合わせや顎関節の状態などの口腔の健康状態を評価することが重要であることを示唆しており、適切な口腔管理と動機付けが重要であることを示している。</p> <p>さらに、この研究で口腔機能低下に対する一般の認識が低い可能性があることが示唆された。</p>	
2023/9/27	森助教	Oral Health Literacy and Dental Care among Low-Income Pregnant Women	
		Catherine Maybury, Alice M Horowitz, Sylvette La Touche-Howard, Wendy Child, Katy Battanni, Min Qi Wang	Am J Health Behav. 2019;43(3):556-568
		<p>本研究では、メリーランド州の低所得妊婦における口腔保健リテラシー (OHL) と出生歯科治療の利用、う蝕の予防に関する知識、理解、実践に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。</p> <p>方法は、一対一のインタビューまたはフォーカス・グループを用いた混合研究であり、対象者は117名の妊婦で、2016年7月から2018年4月の間にメリーランド州で実施された。</p> <p>結果は、低所得妊婦のOHLのレベルは低かった。メリーランド州の保健 (メディケイド) は出生前の歯科治療を支援しているが、妊娠中に歯科受診をしたと回答したのは53%のみであった。ほとんどの女性は、妊婦のためのメディケイド歯科治療プログラムおよび、妊婦歯科治療の重要性を知らなかった。また、費用がかかると治療を受ける余裕がなく、メディケイド対象の歯科医院を見つけることも困難であった。重要なことは、う蝕を予防させる方法を理解しておらず、う蝕を予防するための行動をとっていなかったということである。</p> <p>結論は、う蝕罹患率を減少させるためには、低所得妊婦のOHLを増加させる政策と、プログラムを実施しなければならない。</p>	

2023/10/24	川尻助教	Medical emergencies in dental hygienists' practice
	Jacek Smereka , Marcin Aluchna , Alicja Aluchna , Marcin Puchalski , Pawel Wroblewski , Igor Chęcinski , Marcin Leskiewicz , Lukasz Szarpak	Medicine.(2019) 98:30www.md-journal.com
	<p>ポーランドの歯科衛生士は、公的医療機関、民間の歯科医院、歯科医院、幼稚園、学校など、さまざまな環境で働いています。彼らはしばしば救急医療に直面する可能性があり、その割合は併存疾患と歯科患者の人口の高齢化のために増加しています。この研究の目的は、ポーランドの歯科衛生士の診療における救急医療の発生率と、緊急事態に対する衛生士の心構えと態度を評価することでした。10問の質問票は、613人の歯科衛生士によって記入されました。それは彼らの心肺蘇生訓練、職場での緊急医療機器の入手可能性、救急医療サービス(EMS)コールの必要性を含む医療緊急事態の蔓延、および心停止の管理に言及しました。38.9%が過去12か月以内に基本的な生命維持(BLS)トレーニングに参加し、35.8%が2~5年以内に参加しました。15.17%は、過去1か月以内にEMSコールを必要とする緊急事態を少なくとも1回経験していました。血管迷走神経失神が最も一般的な救急医療(15.97%)であり、中等度のアナフィラキシー反応(13.87%)、発作(8.81%)、過換気危機(7.50%)、および低血糖(7.34%)がそれに続きました。</p> <p>ポーランドの歯科衛生士の診療で最も一般的な救急医療は失神であり、その後軽度のアナフィラキシー反応が続きます。歯科衛生士のほとんどは、過去5年以内にBLSコースに参加していました。しかし、20%は卒業以来参加していません。歯科衛生士は、心肺蘇生法のスキルを維持し、最新のガイドラインを最新の状態に保つために、2年ごとにBLSコースに参加する必要があります。研究参加者の重要な部分は、自己拡張型バッグ蘇生器、中咽頭、声門上気道装置および酸素源を含む救命機器の職場での入手可能性の欠如を宣言しています。国際ガイドラインで推奨されている医療用緊急機器は、すべての診療で利用可能である必要があります。</p>	

2023/11/21	井上講師	Non-Pharmacological Pain Treatment of Patients with Myofascial Pain Syndrome of the Masticatory Muscles—Case Series and Felice Festa
	Monica Macri, Chiara Rotelli, Francesco Pegreffo	Biomedicines. 2023 Oct; 11(10): 2799. Published online 2023 Oct 16
	<p>緒言：無意識の歯ぎしりに関連する筋筋膜トリガーポイント (MTrP) によって引き起こされる頭部および口腔顔面の痛みの軽減を評価することを目的とした。</p> <p>資料と方法：研究は、キエーティ大学口腔外科で行った。研究期間は2020~2022の3年間、患者の治療期間は4か月であった。治療前と治療後、毎月経過観察時に触診した。バイオフィードバックエクササイズを指導した。VASと関連筋の触診を用いて新たな評価を行い、顎関節MRIを撮像し、治療効果と治療成績を評価した。患者は治療期間中、疼痛日記を記載した。SPSS26.0を用いて統計処理を行った。</p> <p>結果：全例に顔面痛を頭痛は認められたが、偏頭痛は認められなかった。主要アウトカムが痛みの軽減であり、4か月後に軽度の口腔顔面痛を伴う再発を示したのは、6人だけであった。年齢や性別とは無関係であったが、T1時の症状強度や慢性度と関連していた。</p> <p>考察：治療の成功を示す指標は、痛みの消失、機能の改善、標準的なQOLであると考えられる。この治療法は、年齢や性別に関係なく、関節内および関節外の顎関節症患者の筋筋膜症候群の疼痛を効率的に軽減することが証明された。薬物治療や矯正・補綴治療を行わなくても、痛みが軽減されることは、非常に興味深い。筋バイオフィードバックエクササイズは、患者に歯ぎしりをしないよう指導し、スプリントで安静空隙を保つのに十分効果的である。</p> <p>結論：この研究の重要性は、わずか4か月の保存的非薬物療法で口腔顔面痛を治療したことにある。患者は、1年後に再検査を受けたが、軽度の再発を示したのは6人で、薬物療法は必要としないかった。</p> <p>この研究の限界は、年齢の幅が広いことである。とはいえ、咀嚼筋筋筋膜疼痛症候群による口腔顔面痛や関連頭痛を薬物療法を用いずに、しかも、1年後の再発率を低く抑えて治療したいと考える臨床医にとっては、参考になるとと思われる。</p>	

2023/12/27	田口学長	Oral findings in children with congenital cholestatic disease: A systematic review of case reports and case series
	Reynal F, Camoin A, Tardieu C, Fabre A, Blanchet I	Archives de pediatrie 30 (2023) 427-437
	<p>Abstract：先天性の新生児期からの胆汁うっ滞をきたす原因は沢山あるが、なかでも胆道閉鎖症(BA)、アラジール症候群(AGS)、進行性家族性肝内胆汁うっ滞症(PFIC)の3疾患がもっとも頻度が高い。胆汁うっ滞症の多くの因子がこれらの小児のoral healthを悪化させることが知られている。これらの疾病に合併する口腔内症状はなにか？ この論文の目的は先天性胆汁うっ滞性疾患のoral healthに及ぼす影響について評価することである。Case reportとCase seriesのsystematic reviewをPubMed, Cochrane Library, Web of Scienceにおいてフランス語と英語で2022年4月までにpublishされたものを用いて実施。19の研究をピックアップ。うち16はCase report、3はCase series。胆道閉鎖症(BA)、とアラジール症候群(AGS)のみ取り扱われていた。下顎の形態異常、歯の構造、歯周状態についてインパクトがあった。アラジールでは顔面の形態異常が特異的であった。歯牙の石灰化の時期に高ピルビン状態に暴露することで特異的な色素沈着が起こっていた。歯周環境は歯肉の炎症は頻度が高く、特に治療に用いる薬剤やpoor oral hygieneに起因している。カリエスのハイリスクについてこれらの患児の分類に関するコホート研究が必要だ。アラジールと胆道閉鎖の口腔内症状は沢山あるため、できるだけ早く患児のケアチームの中に歯科チームを加える必要がある。胆汁うっ滞症の個々の疾病に関して個別の前向き研究を行う必要性が明らかである。</p>	

IV. 体系的な FD・SD の実施

体系的なFD・SDの実施（2023年度）

【学内開催】

	領域	課題	形式	日程	講師	対象	参加者数
1	管理・運営	短大運営に関する知識向上 新規採用者の研修・オリエンテーション（法令遵守関係含）	講義	2023年 4月12日	松尾学科長 赤坂課長補佐	新任教職員	教職員4名
2	教育	教育能力向上 指導目標の設定とパフォーマンス評価	講演	2023年 4月27日	松尾学科長・中国講師 尾崎教授	専攻科学生TA	専攻科生18名 教職員5名
3	研究	研究全般 研究報告	講演	2023年 5月24日	黒木講師	全教員	教員15名
4	厚生補導	学生指導能力向上 ケアケアを改善するカンカンマメシステム	講演	2023年 7月4日	古野教授	全教職員	教職員16名
5	教育・厚生補導	教育・学生指導能力向上 介護職員の職種と資格について	講演	2023年 8月2日	秋竹講師	全教職員	教職員18名
6	研究	研究全般 福岡医療短期大学2階研究室での研究活動報告	講演	2023年 8月8日	北尾教授 口腔医学研究センター	全教員	教職員17名 歯科大教員2名
7	教育	教育・学生指導能力向上 福岡医療短期大学・福岡歯科大学共同開催 大学におけるR活動の紹介	講演	2023年 9月27日	赤間係長 中国講師	全教職員 歯科大・看護大教育支援・教育学R担当教職員	教職員7名 歯科大職員4名 看護大教職員5名
8	教育	教育能力向上 シラバス作成要領（授業改善検討者）	講演	2023年 11月15日	中国講師 教育支援・教学R室	全教職員	教職員19名

体系的なFD・SDの実施（2023年度）

【学園開催】

	領域	課題	形式	日程	講師	対象	参加者数
1	研究	研究全般	講演	2023年 5月29日 7月31日 9月29日	永嶋教授	当該対象研究者	教員18名 専攻科生7名
2	厚生補導	業務知識・指導能力向上	講演	2023年 6月15日	保健管理センター 公認心理師 川口智也氏	専任事務職員	事務職員3名
3	管理・運営 厚生補導	後進育成・指導能力向上	講演・グループワーク	2023年 7月4日	キャリア＆ライオンデザイン 表 太田由美子氏	課長・課長補佐	事務職員1名
4	研究	研究全般	講演	2023年 7月5日	平田密員教授	学園教員希望者	教員4名
5	厚生補導	業務知識・指導能力向上	講演	2023年 8月2日	NPO法人福岡シエンター 研究所副理事・横山美栄子氏	管理職以外の全教職員	教職員14名
6	研究	研究全般	ビデオ講演会	2023年 7月15日～8月4日	ビデオ講演会 磯口バート・シヤパン 松壇里弥氏	全教職員	教職員21名
7	研究	研究全般	ビデオ講演会	2023年 7月25日～8月4日	ビデオ講演会 磯口バート・シヤパン 松壇里弥氏	教職員18名	教職員18名
8	管理・運営	業務知識向上	講演	2023年 8月29日	加藤企画課長 松添財務課長	全教職員	教職員21名
9	厚生補導	業務知識	講演・グループワーク	2023年 9月28日	キャリア＆ライオンデザイン 表 太田由美子氏	係長以下事務職員	事務職員3名
10	管理・運営 厚生補導	後進育成・指導能力向上	講演	2023年 11月27日	NPO法人福岡シエンター 研究所 理事・武藤桐子	管理職の全教職員	教員4名
11	厚生補導	学生指導能力向上	講演	2023年 12月6日	長崎国際大学薬学部 特任教授 山本経之氏	全教職員・学生	全学年線面受講
12	管理・運営	後進育成・指導能力向上	DVD視聴他	2023年 12月20日	—	事務課長・補佐	事務職員1名

V. 主催セミナー・公開講座

令和4年度福岡医療短期大学

口腔介護スキルアップ講座特別編 新人歯科衛生士スキルアップ講座

～臨床にすぐ役立つ『口腔機能発達不全症』～

後援：福岡県歯科衛生士会・福岡県歯科医師会・福岡市歯科医師会



本講座は平成21年度に文部科学省の委託を受け“社会人の学び直し講座”としてスタートしました。これまでの受講修了者は349名（歯科衛生士・歯科助手330名・歯科医師19名）を数え、在宅や介護施設への訪問診療や口腔ケア、診療室での口腔機能向上支援、摂食嚥下リハビリテーション、地域保健活動などの実践の現場で活躍しています。

人生100年時代を考えたとき、如何に健康寿命を延ばすかがカギとなりますが、その基礎を作る大切な時期が小児期です。乳幼児期は、口腔機能の獲得期であり、さらに、口腔機能の発達を促すための正しい生活習慣を身につける大切な時期でもあり、小児からの継続的な口腔管理が重要となります。そこに着目し、令和4年度は、「臨床にすぐ役立つ『口腔機能発達不全症』」をテーマに、近年開催していた高齢者や要介護者の口腔ケアに必要な基礎知識から実践を学ぶ講座の特別編として裏面のプログラムで開講いたします。各講義内容のスペシャリストを講師に迎え、講義と実習で構成し、充実した内容を企画しました。1日受講コースを修了された方には「ディプロマ（修了証）」を授与いたします。なお、1日受講コースは、定員20名となっておりますので、お早めにお申し込みください。

*受講を希望される方は、裏面の申込書に記入の上、Faxでお申し込みください。

開催日：令和5年3月12日（日）10:00～16:00



食べる



話す



呼吸する

学校法人 福岡学園 福岡医療短期大学
就業力支援委員会 口腔介護スキルアップ講座
〒814-0193 福岡市早良区田村2丁目15-1
Tel:092-801-0439 / Fax:092-801-4473
URL: <https://www.fdcnet.ac.jp/jcol/>

令和4年度 福岡医療短期大学 口腔介護スキルアップ講座

期日	時間	教育項目	時間(分)	講師
令和5年 3月 12日 (日)	9:30～ 9:50～10:00	受付 開講式・オリエンテーション	10	
	10:00～10:50	【講義】 ①歯科衛生士に必要な小児科の知識	50	福岡医療短期大学 学長 田口智章(小児外科医)
	10:50～11:50	②口腔機能発達不全症に関する基本的な考え方 口腔機能発達不全症の評価と管理方法	60	福岡歯科大学成育小児歯科学 講師 柏村晴子
	11:50～12:20	③口腔機能発達不全症の診断と保険算定 (小児口腔機能管理料を理解する)	30	福岡歯科大学医科歯科総合病院 病院事務課課長補佐 坂本 静
	13:30～16:00	【演習】 ④口腔機能発達不全症の評価方法の実際 ⑤口腔機能発達不全症に対するトレーニング (口腔機能トレーニング・MFT含む) 修了式	150	福岡歯科大学成育小児歯科学 講師 柏村晴子 福岡医療短期大学歯科衛生学科 講師 井上庸子

【開催場所】福岡医療短期大学 講義室および実習室

【受講定員】1日受講コース：歯科衛生士・先着20名

※演習(④⑤)の受講を希望する方は、講義(①②③)の受講が必要となります。演習のみの受講はできません。

講義(①②③)のみ受講コース：各先着50名(オンライン受講はこの限りではありません)

※講義はオンライン受講も可能です。オンライン受講希望の場合は、約1週間前に参加方法をメールにてお知らせしますので必ずメールアドレスをご記入下さい。

【受講料】

1日受講コースの場合	6,000円(実習材料費込)
選択受講の場合	①,②,③:各2,000円

※すべての講義・演習を修了された方には「ディプロマ(修了証)」を授与いたします。

※ご入金いただきました受講料は、如何なる理由であってもご返金は出来かねますのでご了承下さい。(開催中止時除く)

※新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況によっては開催中止となる可能性もありますのでご了承下さい。

【受講申込】下記を記入のうえ、必ず FAX 092-801-4473 でお申込みください。

申込受付期間：令和5年1月10日(火)～2月24日(金)

希望コース	<input type="checkbox"/> 1日受講コース <input type="checkbox"/> 選択受講コース (<input type="checkbox"/> ① <input type="checkbox"/> ② <input type="checkbox"/> ③)		受講形態	<input type="checkbox"/> 来学 <input type="checkbox"/> オンライン
氏名	フリガナ	勤務先 名称	フリガナ	
ご案内送付先 <input type="checkbox"/> 職場 <input type="checkbox"/> 自宅	〒			
Tel		Fax		
E-mail				

*受講者登録書、受講料支払い方法等は、受講申込受付後順次送付いたします。

第22回福岡医療短期大学公開講座 人生を変える！～腸活・口活のススめ～

日時：令和5年10月29日（日）10:00～12:30

場所：福岡医療短期大学 303講義室・コミュニティホール1

- 9:00～ 受付開始
- 9:55～10:00 開会のあいさつ 福岡医療短期大学 学長 田口智章
- 10:00～10:25 講演1 「歯周病が及ぼす全身への影響」
力丸 哲也 福岡医療短期大学 教授
- 10:25～10:50 講演2 「口腔内細菌と腸内細菌の関連」
松尾 忠行 福岡医療短期大学 教授
- 10:50～11:00 休憩
- 11:00～12:00 特別講演 「腸内細菌叢は寿命を制御する」
内藤 裕二 京都府立医科大学大学院医学研究科
生体免疫栄養学講座 教授
座長 田口 智章 福岡医療短期大学 学長
【共催：ミヤリサン製薬株式会社】
- 12:00～12:10 休憩
- 12:10～ 質疑応答 田口 智章 福岡医療短期大学 学長
齊田 直樹 特別養護老人ホーム「サンシャインプラザ」施設長
- 質疑応答終了後 閉会のあいさつ 福岡医療短期大学歯科衛生学科同窓会「瑞樹会」 会長 赤木万喜子



★お弁当とお茶をご用意しております。

参加申し込み方法：福岡医療短期大学公開講座委員会宛に **FAX・電話・メール**でお申し込みください。
後日、**受講票**を **FAXまたは郵送**で送信または送付させていただきますので**必ず連絡先をご記入下さい**。

申し込み期日：9月1日～10月21日（複数でお申し込みの場合は、用紙をコピーしてお使いください。）

氏名(ふりがな)	自宅または勤務先の住所等連絡先を記入してください。
	(自宅・勤務先) 〒
勤務先	
	FAX
	TEL
職種	
	E-MAIL

事務局：福岡医療短期大学 公開講座委員会 〒814-0193 福岡市早良区田村2丁目15-1

FAX:092-801-4473 TEL:092-801-0923または0439 E-MAIL:gakumuj@fdnet.ac.jp

※ **定員(150名)**になり次第締め切らせていただきます。なお、**参加料は無料**です。

共催：福岡医療短期大学 歯科衛生学科

歯科衛生学科同窓会「瑞樹会」・福岡歯科大学医科歯科総合病院 歯科衛生士部

特別講演 演者プロフィール



京都府立医科大学大学院医学研究科 生体免疫栄養学講座 教授 内藤裕二 先生

消化器専門医として最新医学に精通し各地で講演も行っている。消化器病学や消化器内視鏡学、生活習慣病の他、健康長寿や抗加齢医学、腸内フローラや酪酸菌研究も専門としており、「京丹後長寿コホート研究」で腸内フローラ解析に携わっている。酪酸菌と健康長寿の関係などの研究をはじめ、長年腸内細菌を研究し続けている本領域の第一人者。

学歴

1983年3月31日 京都府立医科大学医学部卒業
1993年2月24日 医学博士（京都府立医科大学）

職歴

1998年4月1日 京都府立医科大学助手 第一内科学教室勤務
2000年4月1日 京都府立医科大学助手 京都府知事公室職員課参事
2001年7月1日 米国ルイジアナ州立大学医学部 分子細胞生理学教室客員教授（兼任）
2005年6月1日 京都府立医科大学生体機能分析医学講座 助教授
2008年4月1日 京都府立医科大学大学院医学研究科消化器内科学 准教授
2015年4月1日 京都府立医科大学附属病院内視鏡・超音波診療部部長
2021年4月1日～ 京都府立医科大学大学院医学研究科生体免疫栄養学講座 教授

学会役員

日本酸化ストレス学会理事長（2020～）
国際フリーラジカル学会アジア支部 President（2022～2023）
日本消化器病学会財団評議員（2019～）
日本消化器内視鏡学会財団評議員、近畿支部長（2018～）
日本消化管学会代議員，総務委員会委員
日本消化器免疫学会理事
日本抗加齢医学会理事
日本高齢消化器病学会理事
日本微小循環学会理事
日本小腸学会理事
日本潰瘍学会理事長
日本機能性食品医用学会理事

著書

- ・消化管（おなか）は泣いています ダイアモンド社 東京 2016年
- ・人生を変える賢い腸のつくり方 ダイアモンド社 東京 2016年
- ・胃がんの原因はピロリ菌です 大垣書店 京都 2016年
- ・脳腸相関 各種メディエーター、腸内フローラから食品の機能性まで 医歯薬出版 東京 2018年
- ・いつも同じ便秘薬を処方するあなたへ エキスパートが贈る便秘薬との向き合い方 金芳堂 京都 2019年
- ・すべての臨床医が知っておきたい腸内細菌叢～基本知識から疾患研究、治療まで～ 羊土社 2021年
- ・すごい腸とさんねんな脳 総合法令出版 2023年
- ・最高の食べ方がわかる！ 老けない腸の強化書 専門医が教える45の金言 新星出版社 2023年

テレビ出演

- ・NHK総合： ヒューマニエンスQ（クエスト）シーズン2、あさいち
- ・NHK BSプレミアム： ヒューマニエンス
- ・NHK Eテレ： きょうの健康
- ・テレビ朝日： モーニングショー
- ・日本テレビ： 世界一受けたい授業

VI. 国際医療支援

水田理事長の許可を得て、コロナ禍で中断していた小児外科手術国際医療支援を、新型コロナが2類から5類になるのを機に2023年6月から再開しました。3年4か月ぶりです。このプロジェクトは国際医療NPO法人「ジャパンハート」(以下JHと略す)(東京:吉岡秀人代表)の要請で2016年から九州大学小児外科時代に小児外科の高度手術の支援を、行ってきたもので、JHの活動の場であるカンボジアとミャンマーで実施してきました。今回は令和5年6月と12月の2度実施しました。

6月の日程は以下の通りです。

6/4	移動	福岡ーバンコクーヤンゴン
6/5	ヤンゴン小児病院	カンファレンス、診察、病棟回診、病院長面談
6/6	ヤンゴン小児病院	手術(胆道閉鎖、肝移植後全麻下エコー/針生検) 症例相談:肝移植術後、肝芽腫など
6/7	ヤンゴン小児病院	手術(胆道拡張症、胆道閉鎖) 症例相談:肝移植術後、肝芽腫など
6/8	移動	ヤンゴンーバンコクービエンチャン
6/9	ラオス小児病院	視察(手術室、病棟、外来)、病院長面談
6/9-6/10	移動	ビエンチャンーハノイー福岡

6月はミャンマーに関してマスコミの注目度が高く、以下の報道がなされました。

- ◆NHK「おはよう日本」2023年6月9日(金)7:00~放送
<https://www.nhk.jp/p/ohayou/ts/QLP4RZ8ZY3/episode/te/GXPJ9KQMJ4/>
- ◆西日本新聞 2023年6月10日(土)朝刊 (図3)
<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/1096732/>
- ◆東京新聞 2023年6月16日(金)夕刊(図4)
<https://www.tokyo-np.co.jp/article/257028>

ラオスでは首都ビエンチャンにあるラオス唯一の小児病院を訪問しました。ラオスでは小児の肝芽腫が年間10例くらいありますが、肝切除がまだ1例も行われてないのが現状です。現在進めているラオス政府とJHの協定締結が済めば2024年から肝切除がスタートできそうです。病院長とも面談し、まず肝切除からスタートし将来は肝移植までもっていくことで合意を得ました。

12月の日程は以下の通りです。

12/3	移動	福岡ーバンコクーヤンゴン
12/4	ヤンゴン小児病院	病院長面談 肝移植術後および術前カンファレンス、診察、 病棟回診 小児歯科外来診察視察、小児歯科材料寄贈
12/5	ヤンゴン小児病院	手術(胆道閉鎖 1例) 症例相談 肝移植術後、肝芽腫、巨大肝過誤腫 福岡歯科大学 50周年記念歯ブラシ寄贈
12/6	ヤンゴン小児病院	手術(胆道閉鎖 1例、胆道閉鎖疑 1例) 症例相談 肝移植術後、肝芽腫、巨大肝過誤腫ど
12/7	ヤンゴン小児病院	術後回診、症例相談、今後の方針 ドリームトレイン(JH運営の養育施設)視察
12/7-12/8	移動	ヤンゴンーバンコクー福岡

今回は歯科の教授とコンタクトがとれて肝移植術後の患児の口腔内を診察していただき、日本から持参した小児歯科診療物品をプレゼントしました。今後の歯科診療の道がある程度開拓できたと思います。歯科大学 50周年記念歯ブラシも医療スタッフにプレゼントしました。以下次回からの歯科ミッションを立ててみました。

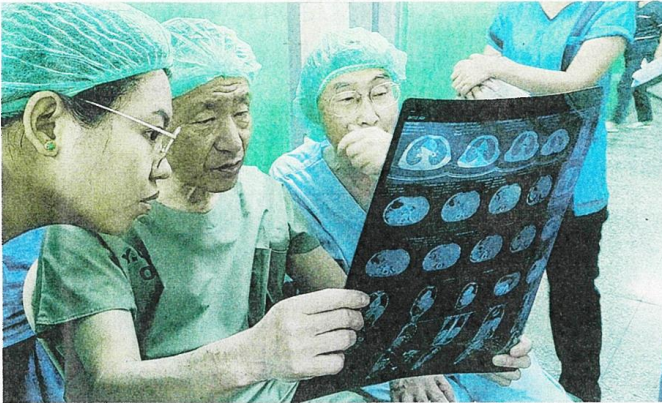
次回からの歯科ミッション(田口案)

- 1)肝移植術後患児 3名の口腔内診察治療と歯の色素沈着に対する審美的ケア
- 2)血液・腫瘍患者の口腔内診察とケア(病院長希望)
- 3)入院患者の術前口腔診察
- 4)入院患者の患者及び保護者の口腔ケアの重要さの啓蒙と歯磨き指導
- 5)小児歯科外来の診察の見学と手伝い
- 6)JH 養育施設ドリームトレインの入所者の口腔教育と歯科健診

VII. 掲載雑誌新聞記録

日本人のベテラン小児外科医2人が6月上旬、ミャンマー最大都市ヤンゴンの小児専門病院で、肝臓や胆道に疾患を抱える小児患者4人を手術した。2021年のクーデター後、現地の医療機関では医師や看護師らの不足が深刻化しており、手術を待つ患者が増えているという。2人は「自分たちの技術をミャンマーの子どもたちのために生かしたい」と語る。(バンコク・藤川大樹)

日本人医師2人、現地で執刀



①6日、ミャンマー・ヤンゴンの病院で患者のCT画像を確認する田口医師(左から2人目)と猪股医師(同3人目)

②6日、手術する田口医師と猪股医師



二人は、福岡医療短期大(左)の田口智章学長(右)と熊本労災病院の猪股裕紀洋院長(右)を続けるNPO法人「ジャパンハート」(東京都台東区、吉岡春菜理事長)が、ミャンマー訪問を要請した。田口さんは九州大大学院教授だった一六年、ジャパンハートの活動に賛同して協力を始めた。二〇年二月までに計十回にわたりミャンマーを訪れ、生体肝移植手術の支援などを行ってきた。しかし新型コロナウイルスの感染拡大に加え、国軍によるクーデターが起き、二一年以降は訪問が途絶えていた。

政変後に医師・看護師不足

コロナ禍が落ち着いたことから、田口さんは今回、現地の状況を把握するたため、生体肝移植手術の第一人者である猪股さんとともに現地入りした。ヤンゴンの小児専門病院で六月六、七の両日、肝臓でつづられた胆汁の流れが滞る難病「胆道閉鎖症」を患う乳児など患者四人の手術を行った。現地の若い医師らが技



5日、ミャンマー・ヤンゴンの病院で、2019年に生体肝移植を受けた患者を診察する猪股医師をいづれもジャパンハート提供

術を学ぶために、手術に立ち会った。田口さんによると、前回訪問時と比べ、この病院では小児外科医など医療従事者が三分の一程度に減り、手術件数は年間六千件から千五百件程度まで落ち込んでいた。胆道閉鎖症は生後二〜三月月での手術が適切とされるが、診断が遅れてしまった患者も複数いたと



ミャンマーの子に手術を

東京新聞

夕刊
中日新聞東京本社
東京都千代田区内幸町二丁目1番4号
〒100-8505 電話 03(6910)2211

王露園
飲んで美味しく、料理のくし味でも大好評!
http://www.gyokuroen.co.jp

紙面から
ちぎり絵で100歳目指す
7
浜松市の天野一子さん(99)は今年、新聞ちぎり絵を始め、花など57作品を仕上げた。

奇跡の生還までの行動は
候補生、昨夏に駐屯地見学
7
4910854951631
00045
文化 小説 3

日本歯科新聞

顎関節症の治療

DHの役割を議論

顎関節学会

顎関節症の治療に歯科衛生士が積極的に関わることは、歯科衛生士の価値をより一層高めることにつながる。9日に開催された第36回日本顎関節学会学術大会の、日本歯科衛生士会共催・臨床医の会合同シンポジウム「歯科衛生士と行う顎関節症病態別治療」で、顎関節症治療における歯科衛生士の役割について議論された。

講演「疾患教育・病態説」学歯科衛生学科の井上庸子 学院医歯学総合研究科地域・福祉口腔機能管理学分

野の曰高玲奈氏が登壇。井上氏は、顎関節症は保



最後に講演者らが集まり、ディスカッションが行われた。

存的治療が主で、医療面接と患者自身の適切なセルフケアが重要であり、歯科衛生士が担う役割はとても大きいと説明した。曰高氏は、医療面接のポイントについて解説。環境因子、行動因子、宿主因子について網羅的にチェックすることが必要だと述べた。過去の研究を引用して、医療者の説明を患者が理解している割合は50%程度に留まることを指摘。患者の来院時に、伝えたい内容について毎回確認することが不可欠だとした。

また顎関節症のリスク因子の一つであるTCH(上下歯列接触癖)について、来院時の質問によるチェックに加えて、患者自身が日常で確認する方法を紹介。デスク作業中の目に入るところにタイマーや付箋等を用いて、自分の歯が接触しているか確認する合図を作成し日々の気付きを促すことで、TCHの改善につなげられるとした。

講演後には各演者に加え、座長を務めた日本歯科衛生士会会長の吉田直美氏、佐藤歯科医院今戸クリニクの佐藤文明氏を交えてシンポジウムが行われ、主に歯科衛生士の役割について議論がなされた。顎関節症治療を始め、歯科衛生士のスキルやキャリアに依りて待遇を高めることで、歯科衛生士のモチベーションの向上、医院の活性化につながるかと分析。さらに、講演等の実績をつくっていくことで、顎関節症関連項目の保険診療化に貢献し、認定歯科衛生士制度の拡大にもつながるとした。

吉田会長は、職能団体として、学会や歯科衛生士会に所属する歯科衛生士を増やすことで、歯科衛生士の存在感、価値を高めていくことが大切だと述べた。

メルマガ無料配信!

日本歯科新聞、アポロニア21、新刊、イベントなどのお知らせをメールにて配信中!



登録はこちらから
www.dentalnews.co.jp/

日本歯科新聞社

VIII. 厚生労働省支援事業

令和5年度 厚生労働省
 歯科衛生士に対する復職支援・離職防止等推進事業
 実施団体として福岡医療短期大学が採択

令和5年度医療施設運営費等補助金（歯科衛生士に対する復職支援・離職防止等推進事業）交付決定通知書（厚生労働省発医政1226第3号 令和5年12月26日）

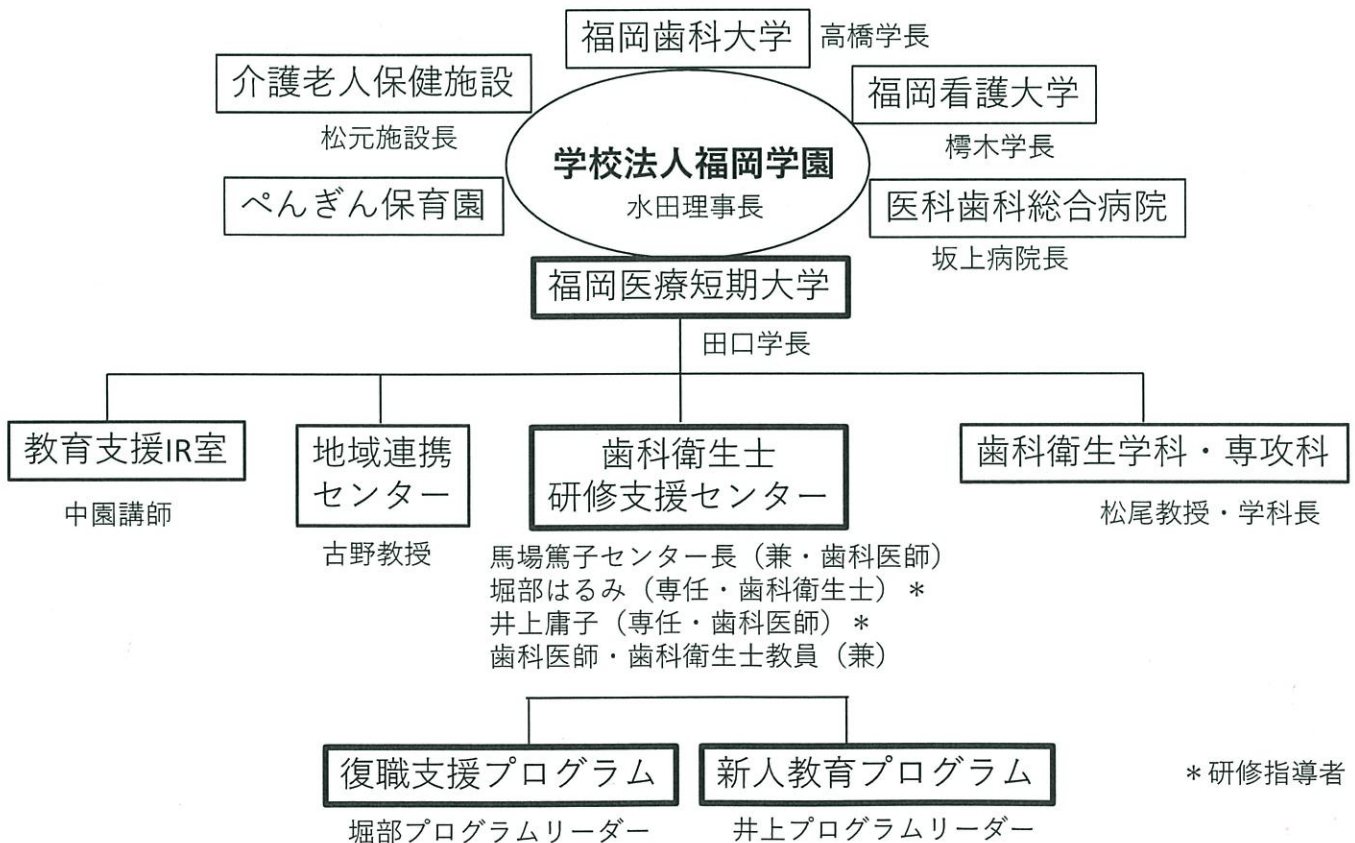
歯科衛生士の未就業者が多く存在していること（歯科衛生士免許取得者は約30万人であるが、就業歯科衛生士数は約14万人）、歯科診療所等への従事者数が慢性的に不足している課題に対応するため、介護等により離職していた歯科衛生士の復職支援や、免許取得後の新人歯科衛生士に対する基本的な臨床実践能力の獲得と離職防止の推進を図る必要がある。

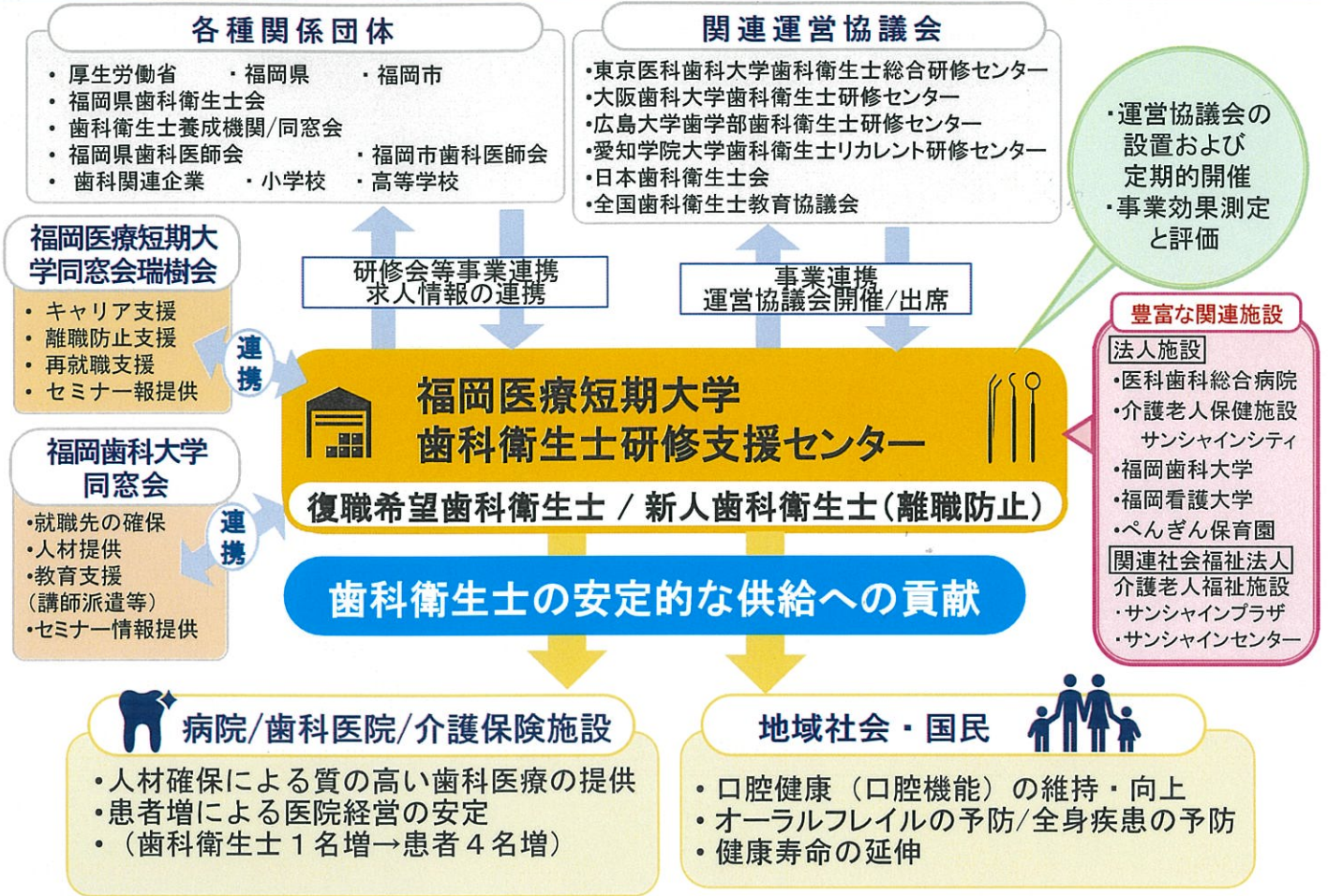
このため、臨床現場を離れていた歯科衛生士や、臨床実習経験が少なく技術に不安を抱える新人歯科衛生士が即戦力として臨床現場で活躍できるように、歯科衛生士の技術支援を担う教育機関による研修の開催を全国的に展開する必要がある。しかし、現在、復職歯科衛生士および新人歯科衛生士を対象に技術修練を提供できる研修機関は全国に4か所（関東地方、中部地方、関西地方、中国地方）しか存在せず、九州地方、東北地方、北海道地方の歯科衛生士を対象とした研修施設の設置が求められている。

そこで福岡医療短期大学はこの事業に応募し採択された。令和5年度より「歯科衛生士研修支援センター」を設置し、「厚生労働省歯科衛生士に対する復職支援・離職防止等推進事業」を推進していく。なお、この事業は令和5年度より5年間の予定であるが、期間延長も検討されている。

令和5年度交付決定通知額：42,978,000円

歯科衛生士研修支援センター組織図





福岡医療短期大学 歯科衛生士研修支援センター

実施計画ロードマップ

多様な関連施設との連携で基礎・臨床・施設での研修を実現。



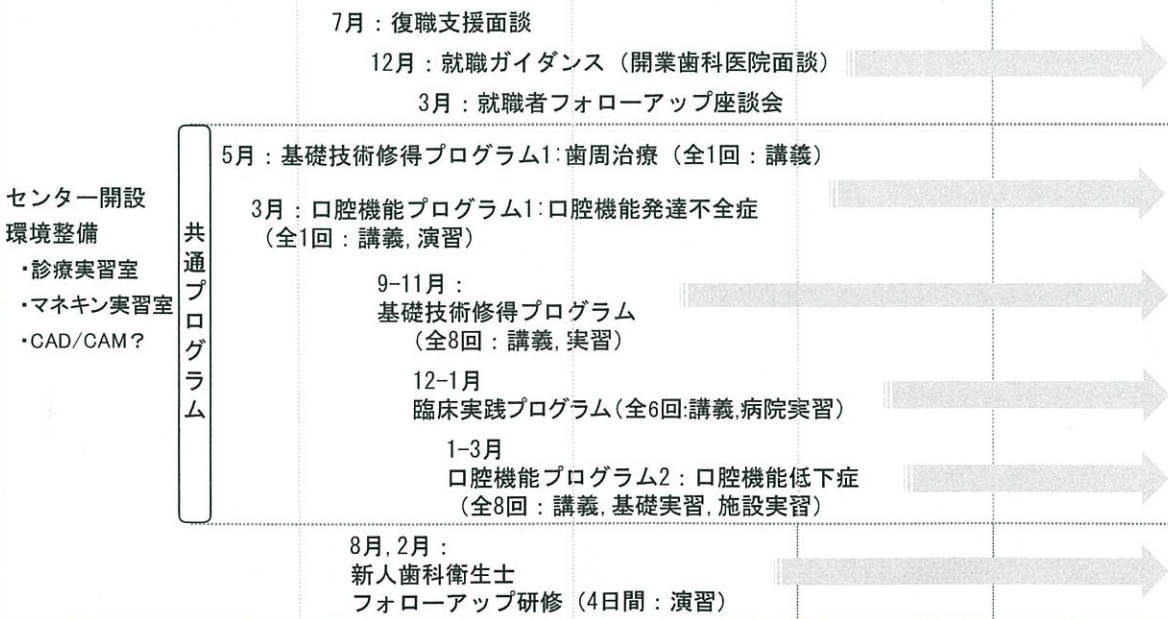
2023	2024	2025	2026	2027	2028以降
------	------	------	------	------	--------

<ul style="list-style-type: none"> 運営協議会 キックオフシンポジウム 	<ul style="list-style-type: none"> 運営協議会 公開シンポジウム 	<ul style="list-style-type: none"> 運営協議会 公開シンポジウム 新校舎移転(予定) 	<ul style="list-style-type: none"> 運営協議会 公開シンポジウム 	<ul style="list-style-type: none"> 運営協議会 公開シンポジウム 	
--	---	--	---	---	--

知識・技術支援から、就職先のマッチング、復職後の悩み相談までサポート

復職支援

新卒支援



臨床基礎から先端医療におよぶフォローアップによる実践能力獲得とキャリアアップを支援

日本歯科新聞

2024年(令和6年)

2月6日

<発行所>

日本歯科新聞社

厚生労働省記者クラブ加盟社

〒101-0061

東京都千代田区神田三崎町2-15-2

電話 03(3234)2475

FAX 03(3234)2477

www.dentalnews.co.jp

jdn@dentalnews.co.jp

無断転載禁止

■年間購読料 23,760円(送料込)
(本体 21,600円+税)

■月4回、火曜日発行

■郵便口座番号 00120-5-130369

福岡医療短期大学

歯科衛生士の復職支援

厚労省事業に選定

福岡医療短期大学(田口智章学長)が昨年11月21日に厚労省「令和5年度歯科衛生士に対する復職支援・離職防止推進事業(歯科衛生士技術修練部門初年度整備・運営事業)」の事業実施団体に選ばれたことを

受け、同大に「歯科衛生士研修支援センター」を開設し、12月28日より研修生の募集を開始している。実施団体の選定はこれが5団体目で、九州地方では初。

平成29年より厚労省が「歯科衛生士に対する復職支援・離職防止等推進事業」を推進。歯科衛生士の未就業者数、歯科診療所等への従事者数が慢性的に不足している課題に対応するべく、育児・介護等によって離職していた歯科衛生士の復職支援および新人歯科衛

生士に対する基本的な臨床実践能力の獲得と離職防止の推進を図ることが目的。

同大は、各種関係機関や関係施設等との連携を通して、離職した人材の復職支援や新人歯科衛生士のフォローアップを行う予定。2023年度復職・新人共通プログラムとして、3月7日に「口腔内スキャナーの基本操作」、17日に「小児からの口腔育成」を開催する。募集定員は30人、免

許取得者であれば無料で受講可能だ。

◆◆◆
歯科衛生士の求人倍率は22.25倍と高いものの、全国各地で人材不足が深刻化。厚労省調べでは、令和2年度末現在の就業歯科衛生士数は14万2760人で、免許登録者数29万8644人のうち14万2760人が実際の従事者となる。

IX. 訪問教授

訪問教授 Visiting Professor

Prof. Souhail Alouini , M.D.

講演日時:2023年4月28日15時

講演場所:福岡医療短大303教室

対象者:専攻科学生・教職員

講演タイトル:Advanced Life Support Algorithm.
New Guidelines 2021 Adult and Pediatric.
成人と小児のALSの2021年ガイドライン



Educator and Director at European resuscitation council.

チュニジア小児外科医、チュニジア大学教授、国会議員

Asian Association of Population and Development(座長:福田康夫前総理、2023年4月24日、東京開催)に招待され、来日時に本学訪問

Short CV:

Dr Souhail Alouini is the former chair of the Health and Social Affairs Committee in the Tunisian Parliament, the ‘Assembly of the Representatives of the People in Tunisia’. He received his Medical Doctorate degree in 1982 at Brussels University and then specialized in pediatric surgery in Belgium. While practicing medicine and teaching in pediatric surgery since 1990 as pediatric surgeon in the Arab World, Dr Alouini has engaged in societal work, as president and member of a number of scientific (president of Tunisian, Arab and UAE pediatric surgery association) and social societies and has lectured in conferences in some 50 countries.



Following the political developments triggered by the Tunisian revolution in 2011, Dr Alouini engaged in the democratic reform by participating in the national dialogue in response to the political crisis in 2013, contributing to the 2014 Constitution through his active membership to the Open Government Group, he was serving his country as a Member of Parliament since 2014. Dr Alouini values open governance, transparency and democracy values, and advocates for health and wellbeing through

his taking part in a number of global and regional parliamentary forums. He is currently a member of the Regional Parliamentary Advisory Group and Chair of the Regional Parliamentary Forum on Health and Wellbeing in the Eastern Mediterranean. Since 2019 become expert in health and well-being with WHO EMRO and European parliamentary forum for sexual and reproductive right. Recently elected as member of the governance committee of European resuscitation council.



講演内容

Learning outcomes

By the end of this lecture you should:
この講義の終了までに学んで欲しいこと

- Know the ALS algorithm for adult and pediatric age.
成人と小児のALSのガイドラインを知る
- Understand the treatment of shockable and non-shockable rhythms.
治療として除細動器(電気ショック)が有効なものと無効なものを理解する
- Know potentially reversible causes of cardiac arrest.
心停止のうち可逆性のあるものを知る

Adult ALS Algorithm 成人のALS

PAEDIATRIC ADVANCED LIFE SUPPORT 小児のALS

Shockable and Non-Shockable

